

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993
4



第92巻 第4号 日本幼稚園協会

フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

—子どもと人間の友あての女性たちの書簡—



旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公開されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。

書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱を受けたH・ケーニッヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう！」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

● 推薦します。

広島大学名誉教授／日本ベスタロッチ・フレーベル学会会長

荘司雅子

全国国公立幼稚園長会会長

江橋照雄

日本保育学会会長

岡田正章

全日本私立幼稚園連合会会長

小林龍雄

全国保育協議会会長

水岡 薫

特 色

- 幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的証言を集めました。
- 師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- “キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- 幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- 女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

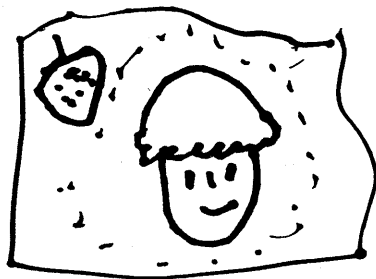
岩崎 次男 他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉・定価4,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第92卷 第4号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十二卷 第四号 —

© 1993
日本幼稚園協会

△巻頭言▽保育の難しい時代に……………関口はつ江……………(4)

保育の知 深くかかわることによって……………津守 真……………(6)

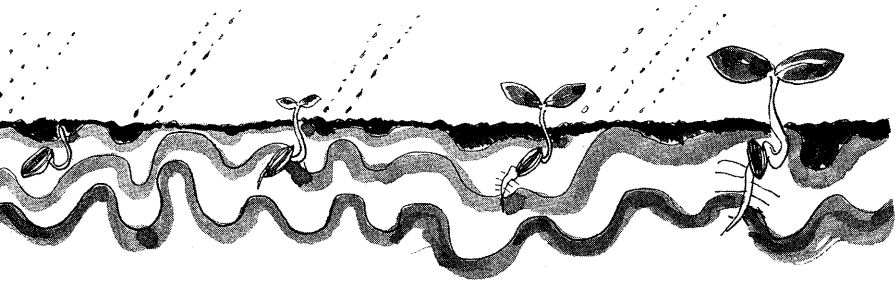
音楽の往来と子供

東洋音楽学会からの報告……………永原 恵三……………(11)

堀合先生に学ぶ(1)……………立川多恵子……………(20)

日本グッド・トイ委員会からの報告

おもちゃに社会性が身につけてきた……………多田 千尋……………(26)



記憶から……………梶田 正子…(34)

公教育は家庭教育にどこまで関与するか(3)

保育園と家庭とのいい関係は……………佐野 洋子…(39)

続・庭の番人 別れの前「子ども」……………土橋 光子…(48)

ある日の育児日記から(28)……………佐藤 和代…(54)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(7)…小林 恵子…(55)

表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



保育の難しい時代に

関口はつ江

このところ、著しい生活環境と世界情勢の変動の中で、価値観や目的が揺れ動き、生活の足場が定まりません。先が見えにくく、過去が役に立ちにくい状況の下で、確かな信念をもって幼い子ども達を育て上げることが、如何に難しいかを実感することの多い昨今です。

難しさの第一は、子ども自体が年々変化しており、その変わり方が大きくなっていることです。子どもの本質は変わらなくても、その表れ方は大きく変化しています。これが幼児かと驚くほど、一般的な幼児の概念では捉えにくい幼児の姿があります。

恐らく大人の価値観や生活の仕方を直接受け取ってしまい、幼児特有の生活ができていないものと思われれます。

第二に親の変化です。能動的な「育てる人」としての親ではなく、共に生活を楽しむ人、或いは子どもに喜びを与えて貰いたい受け身の人になりつつあります。「子どものため」よりも自分自身が安心したり、満足することを優先します。例えば、親から離れにくい子どもに根気よく付き添って保育に慣れさせるよりも、強制的に引き離して、早く自分が解放されたいなど……。

今の保育の現場では、親は保育者と共に子どものために考える協力者になるより、逆に保育者が親の要求や悩みも引き受けなければならないことも少なくなく、保育者の負担は倍増しています。

第三に、保育者自身も保育観が十分には確立しておらず、教育的な方向性が出しにくいことです。幼児の発達の過程や保育の技術は学習していても、知識、技能を何に向けて生かすかについてはよく見えていません。

子どもを尊重すること、共感すること、遊ぶこと、いろいろ教えることなど、すぐ目の前のねらいに対しては熱心に対応できるのですが、そのことが子ども全体の育ちにどう寄与するかの見通しが立たないために、その場しのぎの対症療法的な指導になりがちです。

こうした課題満載の現状は、保育に限ったことではなく、今の社会ではいずれの分野においても同じ

ことが言え、世界中が混沌迷の中にあるのでしょうか。価値の多様化の名のもとにあれもよし、これもよし、の風潮もあります。それでもよく、むしろ多様性が望ましい領域もあります。

しかし、人間形成については、基本は守られるべきだと思えます。幼児期に教育されるべきことは、ごく当たり前の日常的な温かい人間関係であったり、自然の恩恵を実感することであったりですが、それらの体験を通して社会の一員として、また自然と共存する生活者として、節度ある態度で自己を発揮できるような人間性の基礎をつくることなどは必須事項でしょう。

迷いの中の若い保育者が安心して正当な保育ができるためには、強力な精神的バックアップが欲しいのです。保育関係者の総意の結集が求められる現状ではないでしょうか。

(郡山女子大学短期大学部・同附属幼稚園園長)

保育の知

深くかわることによって

津守 真

深いところがかかわれるようにと願って子どもの傍にいと、通りすがりに見ている時とは違ったものが見えてくる。私はこのことを保育の実際の場でしばしば経験してきた。

秋のある日、庭で、水の出るホースをもって遊んでいる子どもがいた。その頃、私は何人かの子どものことで手一杯で、その子と遊ぶことが少なかった。その日、その子はひとりでホースの水遊びをしていたので、私はその子とつき合える者になりたいと思い、しばらく子どもの傍に立っていた。

深くかわかる気を持たないでいる時には、濡れるとか汚いとか、早くしなさいというように、大人の側の枠から一方的に子どもを見て評価することが多くなる。その子とかかわる可能性をもって傍にただで、こまかいところまで気が付き、親しみ深く見られるのは人間関係の不思議である。

その子は、しばらくするとパンツが濡れたらしく、自分で脱ごうとしたがうまく脱げない。土の上で脱ぐと泥がつくし、私は手伝おうと思ひ、声をかけ抱きかかえて部屋に入った。そこで発見したのだが、この子は水でびしょびしょになって遊んでいるように見えたのに、衣服と身体も濡れていない。ほんの少しパンツが濡れたのがいやで脱ごうとしていたのだ。この子は自分も身体は濡れることなく保っていて、水を操作している。

私は一学期のはじめの頃を思い出した。入園当初にこの子は水たまりの中に腰まで入りたがり、身体が泥に汚れることが多かった。泥との境界がなかった自分自身から、周囲とは一線を画した自分自身の認識へと、自我の輪郭が明瞭になってきたように思えた。

この子はパンツをはくと、もはや庭の水場にはいかないで、ホールに走っている。ホールの真中に、箱積木で囲って新聞紙のプールが作っており、そのへりに室内用ジャンブルジムと滑り台が組んであった。その子は積木のへりを冒険しながら歩き、滑り台から滑った。私が下にいて手をひろげると、私の腕の中に入って笑った。いつも鉄砲玉のように走る姿しか私には見えていなかったのに、この時、子どもは私の顔を見て笑った。

それから私の手につかまって平行棒の上を歩いたり、自分ひとりで腹ばいになってむつかしい場所を渡ったり、たのしそうに、自然体になって身体を動かしていた。ひとりでは危なっかしいところでは手をのばして助けを求め、私との関係を意識している。ときどき私の腕の中に顔を埋めに来る。身体と身体の接触を通して、信頼の感覚が互いに伝わっていることは疑いもなかった。はじめはどのように展開するか分からずに、深くかかわれる

ようにと願って傍にいただけなのに、わずか一時間程の間に心が通い合う関係になれるのは、保育者のだれもがどこかで経験していることではなからうか。

保育の実際においては、具体的なことは毎日違う。子どものひとりひとり、保育場面のひとつひとつが独自である。けれどもその毎日の中に共通のことがある。ここに記したある日の保育の中にも、またその他の多くの日々にも共通のかかわりの前提を次に取り出してみようと思う。

1、子どもと深いところがかかわる

浅いところがかかわるときには、大人の側の枠から一方的に子どもを評価しがちである。そのときには子どもの心の深みにある願いや悩みにまで保育者のアンテナが届かない。

保育の中で子どもと大人の両方に通い合う信頼の感覚を保育者が体験するときには、子どもと共有されている心の深い部分でのかかわりがある。それは、生命性とか、宇宙性とか、心の深層とかいろいろのことばで表現しうるだろう。心の深いところがかかわりたいと願っていると、直ちにそれが可能になるのが子どもとのかかわりである。

2、保育者は子どもとかわるたびに自分を新しくする

保育者は、子どもとかわるとき、それまでの自分を転回させて、新しい自分となって子どもに向き合う。そうでないと、それまでの自分にひきずられて、異質な子どもとかわ

わかることができない。私共は、この子はこういう子だという偏見や知識を持っている。また、自分はこんな子とはうまくつき合えないというような、自分自身に対する幻想を抱いている。保育の場ではそのいずれもが碎かれることがしばしばである。また、そうでなければ保育の場は力動的に展開しない。子どもとかわるたびに、大人も自分自身を変えられているのが保育の場である。外から見ればいつもと変わらぬ保育者と見えても、内面は日々新たに変わっている。そうでなかったら、成長しつづける子どもが満足するはずがないだろう。

3、保育者は、前向きに、かわりを継続し、新しい関係を創造する

このことを自覚してないと、子どものかかわりは停滞し、よどんでしまう。人間は何と弱い者であろうか。いつも重力にさからって、未来に向かって立つ精神的存在であることを自らに言いきかせていなければ、保育者個人だけでなく、保育の場全体が低下してしまう。

4、それぞれの子どもがあるがままを認め、そのあるがままとかわる

大人の期待や価値規準とは違って、それぞれの子どもが自分らしく生きることを認め、更にその子どもとやりとりする。子どものそのまますべてを否定してかわるのと、肯定してかわるのとでは、保育者と子どもとの関係はまるで違ったものになる。子どもが自分らしく振舞って承認されるときには、その心の深いところを保育者に見せるようになる。異質な子どもたちのそのままを尊重し、保育者をも含めて一緒に生活する工夫が、保育者

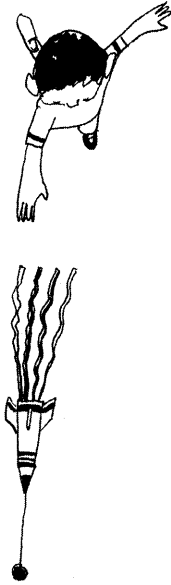
に求められている。具体的には日々違う工夫である。

つけたし

ここに記した「ある日」の翌日、私はこの子の両親と話をする機会があった。この家族には、父親の転勤、家族の病気など大変なことが相次いだ。そのぬきさしならない生活の中で、親はこの子を毎日私共の所に連れてきていた。ここにくるとこの子の生活が落ち着くので、子どもにひかれて毎日連れてきて良かったと両親は語ってくれた。

私自身はこの子とつきあう機会は少なかったのだが、担任の保育者との間で、ここまでかわりが育ってきていることが、この日よく分かった。ここに述べたかわりの基本は、他の保育者との間にも共通の実践の知であろうと思う。

(愛育養護学校)



音楽の往来と子供

東洋音楽学会からの報告

永原 恵三

一、はじめに

一九九二年十月三日、四日の両日にわたってお茶の水女子大学を会場として、東洋音楽学会第43回大会が開催された。本稿はその第一日に本学講堂の徽音堂で行われた公開講演会に關しての報告である。

社団法人東洋音楽学会（以下東洋音楽学会と記す）

は、日本音楽学会と共に日本における音楽学研究の一端を担う学会である。日本音楽学会が音楽研究の様々な分野を全般的に包括するのに対して、東洋音楽学会は分野的にはそれに含まれるが、活動としては独立しつつ相互

關係を保っている。対象は主として日本及びアジアの音楽で、会員は国内外の東洋音楽の研究者のみならず西洋音楽の研究者、さらに伝統音楽の演奏者などによって形成されている。

二、統一テーマ「音楽の『往来』と接点」

今回の東洋音楽学会第43回大会がお茶の水女子大学で開催されるに際して、全体統一テーマを「音楽の『往来』と接点」と設定した。「往来」という言葉には、交通やコミュニケーション等のような情報や物流を表現す

る言葉とは異なって、何か温かい生身の人間と人間との行きかい、それも閑散とした人の流れではなく活気にあふれた人々の動きを示している。そしてその中で様々なすばらしい出会いが生じることをほのめかしているように思われる。音楽は地域や時代、文化を横切つて様々な仕方での出会い、そしてそこに様々な接点が生じる。このことは日本やアジアの中だけのことではなく、世界の至るところの音楽に見られることでもある。特に日本人にとって自らの日本伝統音楽、そして近隣諸国の音楽のみならず、というよりもむしろそれ以上に西洋音楽との関わりは大きな意味をもっている。いったい日本人にとって西洋音楽とはどのようなものであろうかという問いもまた必然的に生じて来る。この問いについては様々なアプローチが可能であらう。

そのアプローチの一つとしてお茶の水女子大学は、日本の音楽受容のあり方、言い換えれば日本における音楽の「往来」と接点の一つの例を示していると考えられる。その理由として次の二点が挙げられよう。つまり東

京の地域性とお茶の水女子大学自体の意味である。まず東京という土地は、伝統音楽と外来音楽との出会いが関西とは異なった仕方で行われたところである。つまり伝統邦楽に西洋音楽の新しい手法を導入した多くの作曲家達が存在することであり、またそれと共に伝統邦楽の内でも新たな創造の可能性を指摘した作曲家達が存在することである。この点に関しては、今回の学会では『現代邦楽作品の系譜―その変化の諸相をめぐって』というテーマによる公開演奏会で、その過程を実際に提示した。お茶の水女子大学もまたこの様な東京に立地している以上、直接間接に影響を受けずにはいられなかったはずである。

次にもう一つの理由としてのお茶の水女子大学自体の意味は、日本の音楽教育の中の重要性である。すなわち、本学は日本の教育の草分け的存在として、特に明治以降の音楽教育において、一般の学校教育の中における音楽に深くたずさわってきた経緯がある。つまり初等教育をはじめとする全ての子供達のための音楽教育のあり

方に関係してきたのである。それは芸術大学などの関与する専門家養成のための音楽教育の次元とは異なった、草の根的な音楽の場での関わりである。そしてそのような人間の生活の中の根源的な場で東西の邂逅が行われたことに大きな意味があり、お茶の水女子大学自体の音楽教育における重要性が明らかになるのである。その意味で音楽教育史上、明治九年に日本で最初に本格的な幼稚園として開園した東京女子高等師範学校附属幼稚園は特に重要である。

周知の通り、この幼稚園は、一八四〇年にドイツのF・フレーベルによって開かれた世界最初の幼稚園(Kindergarten)を模範としてつくられたもので、日本の他の幼稚園はこれに倣うものとなったが、音楽教育的にはこの幼稚園で行われた教育の中で唱歌教育並びに遊戯が重視されたことは注目すべき点である。それは明治に入ってからまだまもなく、音楽取調掛(現東京芸術大学)の開設される前のことであった。この幼稚園の教材である『保育唱歌』の編纂が行われたのは、L・W・メーン

ンによる『幼稚園唱歌』や『小学唱歌集』の編纂以前のことなのである。この『保育唱歌』の大部分の曲は、既に洋楽を学んでいた宮内省雅楽課に作曲を依頼してつくられたものであった。この様にして官立の幼稚園という全く公的な教育の場で洋楽が日本人と出会い、接点を持ったのである。そしてここに明治以降の日本の音楽教育の原点を見ることができよう。つまり教育という公的な場において西洋音楽の積極的な導入が、いわば上からの立場で実践されたのである。

このような趣旨において開催された今回の東洋音楽学会の公開講演会では特に『音楽の往来と子供』と題して、お茶の水女子大学附属幼稚園を中心として、我々の生活の最も身近なかつ最も重要ともいえる次元での音楽の往来を、二人の講演者に語っていただいた。すなわち海老澤敏氏(国立音楽大学学園長、日本音楽学会会長)、および柴田南雄氏(放送大学客員教授)の両氏である。

三、『ルソー・幼稚園・お茶の水』

まず海老澤敏氏からは『ルソー・幼稚園・お茶の水』と題した講演が行われた。ここでは一般にジャン・ジャック・ルソー作曲として知られる唱歌『むすんでひらいて』を手がかりとして、それが日本に広く歌われるようになった過程で東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園）がどのような位置にあったかが語られた。この講演の詳細に関しては、すでに海老澤氏の著書『むすんでひらいて考』（一九八六、岩波書店）ならびに、その母体となる稿が本誌（『幼児の教育』）に連載された。海老澤氏は本誌がその前身である『婦人と子ども』からの長い歴史をもち、とりわけお茶の水女子大学及び東京女子高等師範学校の関係者により刊行され続けた研究雑誌であり、そこに『むすんでひらいて』の初稿が23回にわたって連載されたことに大きな意義を強調している。また海老澤氏は「感想」という表現をしているが、むしろそこに海老澤氏自身の音楽観がルソーを通じて見えかくれするように思えるのであ

る。それはルソーの様に人間を深く愛することから現れる音楽への確固たる確信の態度であろう。ルソーの夢が東京女子師範学校で百年以上も前からはぐくまれ実現した意味の大きさを氏は強調する。ルソーは18世紀の人であり『むすんでひらいて』の旋律ができたのも18世紀、さらにそれが伝播したのは19世紀である。そして幼稚園



がフリーベルによって開かれたのも19世紀のことであつた。18世紀には従つて幼稚園はなかつた。ルソーは五人の子供を捨てたことで批判されるが、海老澤氏は、「おそらくルソーの思いの中に子供がたくさんつどつて楽しく歌つたり遊んだりする姿があつたと信じる。ルソーは子供の純真な世界に対して愛をかたむけ不朽の教育書『エミール』を書いた」と語る。この様に幼子を深く愛したルソー、そしてそのルソーの夢を実現した幼稚園、そしてお茶の水という三点が『むすんでひらいて』という実に小さな、しかしとても大きな曲の中に見いだすことが出来ることを、海老澤氏は語っていたのではないかと思われる。

海老澤氏は『むすんでひらいて考』のあとがきにおいて、音楽美学者のツッカーカンドゥルの遺作ともいうべき『音楽者としての人間』(“Man the Musician”, 1973)に言及している。氏は「……著者が、〈音楽性〉とは何かを問い、本当の音楽性とは、いわゆる音楽的才能に恵まれ、かつ専門的に訓練されることで獲得される排他的な

能力や技術ではなく、全ての人間に内在する資質として捉えていることはまことに印象深い」(注1)と述べて人間と音楽との密接な関係を示唆している。さらに、「ツッカーカンドゥルの指摘する、この人と人との、そして人と事物との(一体化)〈同体性〉、そして(一致)、これこそ、二世紀をこえる昔、かのジャン・ジャック・ルソーが、当時、すでに頂点に達していたかに見える芸術音楽の暴虐を危惧し、弾劾しつつ、音楽の本源的な在り方として早くも主張してやまなかつたものではなかつたらうか」(注2)として、ルソーとツッカーカンドゥルとの深いつながりを明らかにしながら、ルソーの中にある温かい人間性を示唆しているのである。そしてそのようなルソーであつたからこそ、「伝ルソー」(海老澤氏による)の旋律が世界中、そしてまた全くの異文化の地である日本においてもすでに百年以上もの間、幼児たちによって歌われ遊戯がなされてきたのであろう。

一つの曲のもつグローバルな意味が子供の歌の中に見いだされることには大きな意義があろう。つまり『むす

んでひらいて』という小さな一つの曲が西洋という別の文化を日本にもたらしたけれども、その影響は芸術音楽のそれとは比較にならないほどに大きいものであった。

それは受け入れる側のコンテキストの根源的な広さ、すなわち幼稚園という最も基本的教育の場であったこと、

それと同時にその曲の担っていたコンテキストの広さが対応するであろう。そしてこのそれぞれのコンテキストを結ぶ重要な役割を果たしたのが、他ならぬ東京女子高等師範学校及びその附属幼稚園である。ある意味で『むすんでひらいて』の西洋におけるコンテキストは東京女子師範学校に一旦収斂し、そこから再び日本国内へとコンテキストを拡大したとも言えよう。そしてまたこれほどにコンテキストが広がった根底にあったもの、つまりこの『むすんでひらいて』という曲が、確かにルソーの作曲ではないにしても、そのルソーによる原曲が様々な形で西洋世界に広がった、その根底にあったのは、実はルソー自身の音楽に対する根源的な考え方に他ならないのではなからうか。すなわち心から心への素直な伝達行

為、人と人とを隔てるのではなくむしろ結び付けるものとしての音楽の優しさ、そして人間の愛情の深さを、ルソーの音楽は宿していたのではないかと思われるのである。

四、『大正時代の保育唱歌』

柴田南雄氏による講演は『大正時代の保育唱歌』と題して行われた。柴田氏はその音楽教育の最初を東京女子高等師範学校附属幼稚園で受け、逆にお茶の水女子大学音楽科をはじめとして、その作曲家、音楽学者としての広範な活動において、伝統音楽を自らの手中に収めつつ、西洋現代音楽の最先端の技法を日本に紹介したのである。そのために邦楽器を用いた作品もかかっているが、柴田氏の作品でとりわけ重要なのは合唱のためのシァターピースであり、それは様々なレベルでの教育的意義をも含んでいる(注3)。

講演は、柴田氏自身の幼稚園時代である大正時代の保育唱歌のいくつかを実際に復元を行い、海老澤氏の講演

で示された明治以来の幼稚園での唱歌教育の流れを受け継ぐ形で、当時の唱歌教育を音楽の往来の中に位置づけるものであった。柴田氏はまずフレーベルについて、その幼稚園 (Kindergarten) が世界的に新しい運動として広まり、日本においても東京女子師範学校附属幼稚園という官立の幼稚園の基本理念となり、それ故にまた日本の幼稚園全体にゆきわたったことに、その大きな意義を見いだすと共に、そのような一つの教育に関する説があまりに広がったことの希有性を指摘している。またフレーベルが音楽を重視した背景に、H・G・ネーゲリ(注4)がいたことに目を向けている。このようなフレーベルの理念は、その導入にあたっては初代園長の関信三が翻訳を行うなどして大きな貢献をしたが、その後実際に日本というやはり文化の根底の異なる土地で実践されるに従って、次第に相対化されることとなるのは当然であった。そこで大正六年から園長を務めた倉橋惣三の行った様々な改革は、「新たに日本にふさわしい幼稚園教育をしようとした考えのあらわれであろう」と柴田

氏は述べている。講演の中では明治一六年につくられ同一〇年に刊行され、同三四年に改訂された『幼稚園唱歌』の曲を実際に演奏し、またその内の三曲については遊戯を復元することによって、音楽としての様に西洋的要素と日本的要素が混在していたかが具体的に示され



た。まず柴田氏自身の記憶に遊戯をして歌ったことが強く残っていたものとして、『風車』が取り上げられた。

この曲の作詩は保母の豊田芙雄^{ゆづ}、作曲は宮内省の令人により、雅楽と同じく律音階すなわち君が代と同じスタイルをもっている。またこの曲の遊戯が再現されたが、柴田氏自身は当時マニュアルにない動作をしていたが、それはおそらくフレールベルの遊戯が「子供の生き生きとした精神を呼び起こしたのだろうか」と語っている。しかしこの『風車』のようなものばかりでは、フレールベル流のダイナミックな遊戯に適合しないためか、明治三四年の改訂版では滝廉太郎の曲が主流となった。これらの曲はすべて西洋のクラシック（特にハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン）のスタイルであるトニカ（主和音）、サブドミナント（下属和音）、ドミナント（属和音）の連続で統一されて作曲されている。今回はこの滝廉太郎の曲が16曲メドレーで演奏された。これによっていかにそれらの曲が類似しているかが明らかになったのである。また遊戯は『風車』、『鳩ほっほ』、『水あそ

び』が高松晃子（本学人間文化研究科）の協力によりフレールベル会編纂の『幼稚園遊戯』（明治四〇年発行）などに基づいて、本学音楽科学生有志によって再現された。

五、むすび

こうして二つの講演から、明治から大正期にかけての東京女子高等師範学校附属幼稚園において歌われそして遊戯の行われた音楽が、子どもの音楽という次元で東西の往来と接点を実現していたことが明らかになったのである。またその実現の場こそが、それ以降現代に至るまでの日本の音楽状況、特に西洋音楽受容のあり方の方向性を示す一つの原点と考えられよう。単に過去の事実を回顧するのみならず、それが現代にとっていかなる意味を持つかを考えることが重要である。従って今回の講演が、現代を生きる我々にとって西洋音楽と日本の伝統の関係のみならず、さらに文化としての音楽、教育、そして子どもという観点で西洋と日本の「往来」を考える一

つの手がかりとなれば幸いである。

最後に、今回の東洋音楽学会第43回大会を開催するにあたって、本学家政学部児童学科の本田和子教授には多大な御尽力を戴きましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

(注)

1、海老澤敏『むすんでひらいて考』岩波書店、一九八六 P. 357

2、同書 P. 358

3、柴田南雄のシアターピースに関するの教育的意義については拙稿「日本の音楽教育における合唱―柴田南雄の作品を中心にして―」(『待兼山論叢』第24号美学篇、25―46 一九九〇) 参照。

4、H・G・ネーグリ(一七七三―一八三六)はスイスの音楽教育家、作曲家また楽譜の出版者。歌曲や合唱曲を作曲し、自らも合唱団を組織。また、スタロツチの音楽教育理論を支持。本講演では、『白バラのおう

夕べは』が例示された。

(参考文献)

海老澤敏 一九八六『むすんでひらいて考』岩波書店

「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編、一九八四

『お茶の水女子大学百年史』「お茶の水女子大学百年

史」刊行委員会

フレーベル会編 一九〇七『幼稚園遊戯』フレーベル会

遠藤宏、一九五〇『滝廉太郎の生涯と作品』(音楽文庫

11) 音楽之友社

(お茶の水女子大学教育学部音楽科)

堀合先生に学ぶ(1)

立川多恵子

はじめに

堀合文子先生はお茶の水女子大附属幼稚園の教諭として、昭和の変化の多い時代を子どもと共に生き抜かれた人である。退官後は十文字学園の理事長の懇請を受けて、十文字幼稚園の主事に就任し、子どもたちとの新しい生活を始めた。

堀合先生は倉橋惣三の教え子である。倉橋惣三は大正の初めお茶の水女子大の前身である東京女子高等師範学校で教鞭を執りながら、同校保育実習科では保母養成に

関与していた。堀合先生は昭和十四年三月保育実習科を卒業すると同時に附属幼稚園の教諭になり、四十四年の長きにわたって師の教えを実践に生かすべく努力した保育者でもある。

十文字幼稚園の主事に就任しても、今なおクラスを担当し、子どもとの生活に全力投球している先生の姿に限りない保育への情熱を感じる。昨年からは十文字短大幼児教育科の若きスタッフ上垣内伸子さんと一緒に、先生のクラスに入らせていただき先生の保育を学ばせて貰っている。

入園当初の保育

堀合先生の担任するすみれ組（三歳児）に入るのは今回で二回目である。一回目は入学式から数えて四日目であったが、子どもたちが思いのほか落ち着いているのに驚いた。私はこのまま落ち着いてしまうのだろうかと思議に思った。ところが今回は登園時から先生が一人ひとりを靴箱まで出迎え、上靴を履かせたり、帽子を取って掛けて上げたり、鞆も取って上げたりしても、子どもの中には保育室に入るのを拒んで廊下に大の字になって暴れる子、大泣きして先生に抱かれ保育室に入る子さまざまである。緊張がほぐれて、子どもが少しずつ自己主張し始めた結果かもしれない。

降園後、私は先生に「一週間ぶりで、すみれ組に入れていただいたのですが、『いよいよ豆がはじけ出したな』と思いました」と話した。

たしかに先週訪ねた時はすみれ組十七人の子どもたちが先生の掌に入ってしまったように見えて「さすがベテラン」と感心ながらも、これでいいのだろうか考えてし



▲ 保育中の堀合先生

まったが、今回は子どもがいろいろなハプニングを起こすので、さすがの先生も子どもの世話をするため各所を飛び回っていた。

入園当初は慣れないので、身を固くしていた子どもも、次第に自分を出し始めてきたのか、先生のようなベテランでも子どもの行動の予測がつかなくて、忙しく飛び回るようになったのだろう。もっともこうした混乱期には先生が手を掛けることも多く、信頼関係が育つ機会でもある。この時期に子どものやることを傍観しているような保育者だったら、子どもとの関係は深まらない。先生が飛び回りながら子どもとのつながりを持つことによって、やがて新たな落ち着きが実現する。

そこで今回は入園期、子どもとの関係を深めようと努力する先生の保育を实践に即して考えてみようと思う。

子どもの不安を受け止める

その日は「ここが痛い、あそこが痛い」と訴えてくる子どもが多く、先生は救急箱を片手に薬をつけるのに忙

しかった。たまたま一人の女の子が膝がしらを抱えて先生のところへ「痛い」と訴えに来た時、私はどんな怪我かと心配して覗いて見て驚いた。

子どもの差し示す傷はどう見ても、一週間位前に出来たような古傷であり、既にかさ蓋になっていて、殆ど治っている状態だった。しかし先生はそのかさ蓋に丁寧に薬をつけながら「幼稚園のお薬はとでもよく効くからすぐよくなるわよ」と言った。そして上から丁寧にカクトバンを貼ってやった。その時の先生の表情や態度には子どもに対するいとおしさが滲み出ていた。

子どもとのスキンシップを通してルールを伝える

入園当初の子どもは上靴を履いたまま庭に出る子どもが多いが、そうした子どもに対して先生は決して叱らない。そして「よっちゃんのお靴どれかしら」と言って靴を探す。すると一人の男の子が飛んで来て「ぼくのはマングアついているんだ」と言って指差す。先生は目を細めながら「いい靴ね、だれに買ってもらったの、ちょっと

履いてみてくださる」と言って、その子を膝にのせて靴を履き替えてやる。「ちょっと立って見て」の先生の言葉に子どもは得意そうに両足を合わせびんと立つ。先生が「あ！ やっぱりすてきね」と言うと、よし夫は嬉しそうに跳ね回る。

傍で先生とよし夫のやりとりを見ていた他の子が「ほくのはこれ」と言って靴を持ってくる。見るとその子の足も上靴のままである。先生は「あら！ やっちゃんのもかわいいお靴ね」と言いながら、その子を抱いて靴を履かせてやる。そして「今度お庭に出る時はこの靴履きましようね」と言う。やす雄には「今度お庭に出る時は……」ということばが理解できると考えたのだから。子どもによって先生の対応の仕方は少しずつ違っている。

入園当初の三歳児には上靴（白い靴）は室内で履いて、下靴は園庭で履くといった園生活のルールは理解しにくい。先生はこうしたルールを伝えるのもスキンシップを通して行う。習慣が確立する頃にはスキんシップが功を奏して先生とのつながりも確かになるに違いない。

子どもは先生に抱かれて靴を履かせて貰った楽しさと一緒に、園庭に出て行く時下靴に履き替えるルールが分かる。

こんなこともあった。砂場で子どもと遊んでいた時、先生が急に立ち上がって園庭を走って行かれた。私は何ごとが起こったのかと先生の走って行く先を見ていたが、テラスで他の保育者に足を洗って貰った子どもをかかえるようにしてタオルで濡れた足を拭き始めた。

先生は子どもの足を拭いてやる機会をとっても大切にしている、絶好のスキんシップのチャンスと考えている。子どもとの信頼関係が育つまでは、どんなに子どもの世話が大変でも、他の人に手伝って貰わないことにしているようだ。

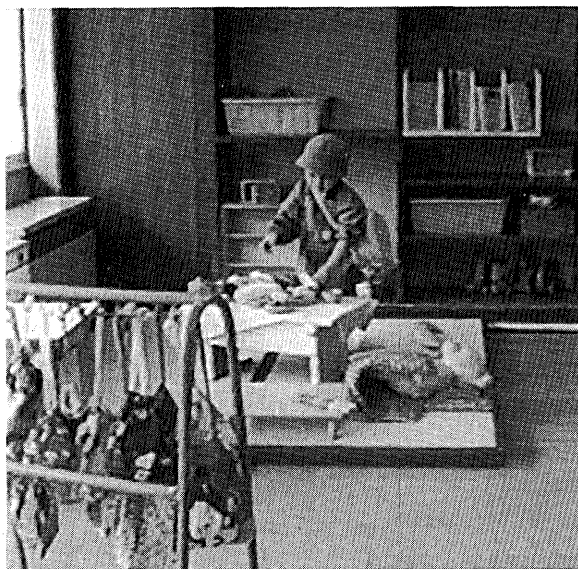
一人ひとりの子どものベースを大切にす

降園時間になってからしょうじがままごとを始めた。先生は他の子の降園の仕度を手伝いながら、彼の遊んでいるのを見ていたが何も言わなかった。しょうじはテー

ブルの上に一つ一つきれいに器を並べると、ダイニング
キッチン引き出しの整理を始めた。フォークはフォー
クでまとめ、スプーンはスプーンでまとめて一本一本き



れいに並べる。他の子が降園の用意をして椅子に座った
ところで、先生はしょうじの肩にかばんを掛けてやっ
た。しょうじはかばんを肩に掛けたままテーブルの上に



◀ しょうじのままごと

並んだ器で食べたり、飲んだりしていたが、突然うなずくように首を振って降園の列に加わった。私は、しょうじが自分なりに「つもり」を達成して、降園の列に加わったのだと思い、降園時から始まった遊びではあったが、彼なりの充実感を得たに違いないと考えた。

先生は「しょうちゃんは最近、朝のうちはどうも調子が出ないのですよ」と話していた。そういえば、降園時になって遊び出したしょうじは今朝も靴箱のところまでお迎えに出た先生の手を振り払って帰ろうとしたので、先生が保育室まで抱いて連れて来たが大あばれして、しばらく床の上に大の字になっていたことを思い出した。先生の話によると、しょうじには今年卒園した兄があり、幼稚園にも何人か顔見知りの子がいて、先日もその子たちに砂をかけられ、大泣きしてから登園を渋るようになったと言うことだった。子どもにもその子なりの事情があり、園生活のリズムにのれるまでは充分時間をかけて待つてやるのが大切であり、それが結局子どもとの関係を大切にすることになる。

むすび

堀合先生は一人ひとりの子どもとのつながりを大切にしている。したがって入園当初の先生の保育はそこに重点が置かれていると言っている。

前述した幾つかの事例は先生が子どもとの関係を具体的にどのようして育てているか、保育を見て私なりに捉えたものである。

その中には先生が意図的に生み出した子どもとの関わりもあるが、意図しないで生まれた関わりもある。いずれにしても、師から学んだことを基にして、更に長年の保育実践から自ら学んで得た保育観から生み出されたものである。保育は子どもを育てると同時に保育者自身を育てると言われるが、堀合先生はこの言葉を文字通り実現させた保育者の一人と言えよう。

(十文字学園女子短期大学)

日本グッド・トイ委員会からの報告

「おもちゃに社会性が身についてきた」

多田 千尋

今年度のグッド・トイ100の傾向

「フライパンや包丁が、食卓を豊かにしてくれる生活道具ならば、おもちゃはコミュニケーションを豊かにしてくれる生活道具である」と、ヨーロッパのあるおもちゃメーカーの開発本部長が語ってくれた。

こうしたおもちゃ観には、おもちゃイコール子どもものものといった図式は描かれていない。赤ちゃんからお年寄りまでの生活文化を高めてくれる道具としての位置付けがなされているのである。

こうした思いを持って、日本グッド・トイ委員会も毎年おもちゃの選考会を開催している。

一九九二年度の「グッド・トイ100」選考会は九月下旬に開催され、教育学者、社会福祉学者、建築家、デザイナー、絵本作家、保母、おもちゃコンサルタントなどの選考委員約100名に、子ども選考委員約200名が勢ぞろいした。日本で市販されているおもちゃの中から、100点だけ良いおもちゃを推薦する、年に一回の選考会である。

玩具メーカー、作家、輸入代理店、地方自治体か

日本グッド・トイ委員会最終選考委員一覧表

氏名	所属	氏名	所属
1 一番ヶ瀬康子	日本女子大学 人間社会学部教授	20 横山 裕	三郷市立井口小学校教諭
2 乾 孝	法政大学 名誉教授	21 豊泉 尚美	富山美術工芸専門学校講師
3 大田 堯	日本教育学会会長	22 多田 信作	芸術教育研究所所長
4 小川 信子	日本女子大学 家政学部教授	23 尾崎 正峰	一橋大学講師
5 小川 かよ子	建築家	24 正岡 慧子	児童文学作家
6 桜井里二	老人ホームさくら苑 苑長	25 松樹 啓子	清瀬養護学校教諭
7 俵 萌子	評論家	26 千住 栄博	元新宿区教育委員会社会教育課
8 テリー・スザン	こどもの城 国際交流部部长	27 岡宮 町子	中野区青年学級指導員
9 供田 惺	こどもの友社 社長	28 陳 祖 信	東京都立大学大学院
10 中村 悦子	大妻女子大学 児童学部教授	29 亀田 達夫	主婦の友社通販 本部長
11 中野 正規	特養リバーサイド田名ホーム施設長	30 梅津 朋子	福武書店幼児通信教育部
12 天野 ゆかり	おもちゃ美術館研究室主任	31 阿部 祥子	日本女子大学住居学科助手
13 大井 弘子	人形劇団カラパス主宰	32 千葉 和夫	日本社会事業大学助教授
14 松谷 みよ子	児童文学作家	33 草刈 秀紀	世界自然保護基金日本委員会
15 松浦 龍子	やなせ幼稚園教諭	34 馬場 祝子	東京ミュージックボランティア協会
16 丸山 智子	渋谷区立西原保育園保母	35 多田 千尋	おもちゃ美術館研究室室長
17 毛利 子来	小児科医	36 二瓶 健次	国立小児病院 神経科医長
18 山住 正己	東京都立大学 人文学部教授	37 江本 扶抄子	聖母看護短期大学助手
19 山田 美和子	全国ボランティア活動振興センター所長		

ら応募のあった六八七点のおもちゃの中から、音や色が美しく、いろいろな動きをする、丈夫で壊れにくい、みんなと楽しく遊べるなどを基準に、「見る・聞くおもちゃ」「ごっこ遊びおもちゃ」など七部門に分けて選考する。

部門別では、ゲームおもちゃが最も多く二七点。室内遊びのおもちゃの開発に力を注ぐ玩具メーカーの方向性が色濃く出た。相撲やサッカーの人氣に合わせて売り出されている「めざせ大関」や「スーパーサッカーDX」。また、毎年着実に人氣が高まっているジグソーパズルは、余暇が増えたせい、ファミリーに幅広く受け入れられている。なかでも、エコロジー色の強い「動物たちの地球」や、学習効果もねらっている「パズル日本全図」などのジグソーパズルは特に目立った。

かつては、外遊びおもちゃが主流であった運動を楽しむおもちゃの部門も、室内おもちゃが集中している。赤ちゃんの手の運動を促す「ベビージム」、

九つの的のボールを自由に動かすことができる
 「パーティわなげ」など、室内でのおもちゃが目立
 ち、おもちゃの側からも、最近の子どもたちの遊び



▲▼ グッド・トイ100選考会風景



の傾向が伺える。
 理科学おもちゃは六点。遊びを通してソーラーシ
 ステムを学べる「ソーラーカー工作基本セット」や

水の流れを考えながら遊ぶスウェーデン製の「カナルシステム402」などが選ばれた。理科学おもちゃ部門は、応募数、選定玩具数とも年々減る一方である。コンピュータ化、エレクトロニクス化など、おもちゃそのもののハイテク化は目覚ましい限りであるが、子どもたちの科学の目を養うおもちゃの物足りなさを感じる。

市場に回るおもちゃの中で、日本玩具協会が定めた安全基準にクリアしたおもちゃには、STマーク（セーフティ・トイ）がパッケージに付けられている。昨年度のSTマーク認可おもちゃは一〇七〇〇点であった。ようするに、新商品の既製品おもちゃが一万点以上も市場に出回ったということになる。

こうした状況を考えて、日本グッド・トイ委員会は、毎年あふれるように登場するおもちゃの中から、消費者が良いおもちゃを選ぶための「ものさし」作りをしているのである。母親や父親が、子ど

ものためにおもちゃを買い与える目安。障害児施設での子どもの機能向上のためのおもちゃ。老人ホームでの、余暇の楽しみやリハビリとしてのおもちゃ。幼稚園・保育所の子どもの遊びを、豊かにしてあげるためのおもちゃ。このようなさまざまなおもちゃの「ものさし」が、今日必要になっている。

そして、こうしたさまざまなフィールドで、おもちゃの役割や活用に新たな芽が出始めている。

幼稚園で活躍するおもちゃたち

岩手県盛岡市にある愛育幼稚園は、三つの教室（計二一五平方メートル）を改造し、おもちゃ美術館を開設した。各部屋を「おもちゃ美術館」「お話しと遊びの部屋」「子ども文庫」とし、グッド・トイ100を中心にした約五〇〇種類のおもちゃや、約五〇〇〇冊の絵本、童話を展示・貸し出している。

同センターは、常設展示室、おもちゃの貸し出し

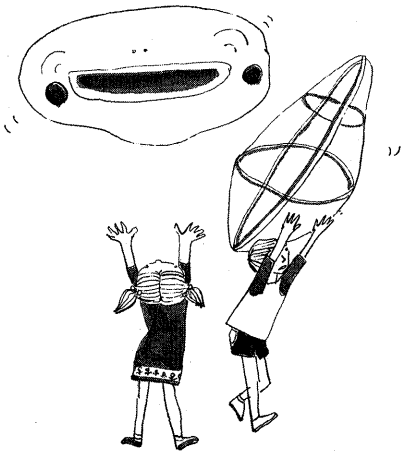
コーナー、世界の児童文庫、資料、文献部門の五部門に分かれており「見る、借りる、遊ぶ、調べる、作る」という五つの機能を備えている。児童教育の専門家、一般に関係なく、誰でも気軽に利用できる。

「おもちゃ美術館」には、グッド・トイ1000の他、岩手県の郷土玩具なども含めた日本の郷土玩具をはじめ、東北地方に昔から伝わる木馬や、イギリスのミニチュア人形、デンマークのブロックなど、木製、金属製、布製など、子どもの夢を育てるおもちゃを一同にそろえ、遊んだり借りたりすることができる。おもちゃのなかには、生活学園短期大学の学生たちが試作した木製のおもちゃ一〇点もあり、学生にとっては実習の場としても活用されている。

また、おもちゃに関する文献を調べることやおもちゃについての相談、手袋や割りばしなど身近な材料でおもちゃを手作りして楽しむこともできる。その他、東北地方にまつわる民話やわらべうた、世界

の絵本を置いて、訪れる人に素朴な児童文化に親しんでもらい、今後は規模を拡大して、児童文化に関する東北の拠点として整備していく方針だ。

幼稚園が、子ども文化活動の拠点をもつことは、



地域文化との相乗効果を生む。地域には公民館や文

化センター、福祉会館などいくつかの文化拠点がある。しかし、長い年月の間、こうした施設は、狭い枠にはまった融通のきかない空間になってしまっているところも数多くある。今や、既存の文化施設とは持ち味の違った文化の拠点が、地域に求められ始めている。地域住民の活動意欲に十分答えられる場が必要であり、意外性のあるユニークな企画で、地域を刺激する必要も出てきている。こういった意味で同センターのおもちゃ美術館をはじめ、さまざまな子ども文化活動は評価されるべきであろう。

また、通園する子どもやその父兄にとってのみ意味のある幼稚園の時代は、終わりを告げているのではないか。これからの幼稚園は、地域に文化を提供するぐらいの力量を身につけるべきである。そういった幼稚園こそが、本当の意味で地域に根つき、地域から好感を持たれる教育の場になるはずである。

福祉・医療をサポートするおもちゃ

お年寄りには、むかし蓄えた多くの遊びが眠っている。一方、子どもたちは遊びをたくさん欲しがっている。こうした両者の交流に、おもちゃが潤滑油の役目を果たし始めてきた。

横浜市の特養老人ホーム「さくら苑」には、世界のおもちゃを集めたおもちゃ美術館がある。ここでもグッド・トイ100が活躍している。おもちゃを通して、遊びに来る子どもたちとの交流を深め、お年寄りたちの暮らしを豊かにすることが目的である。

地域の住民が訪れることのなかった老人ホームに、子どもたちが学校帰りに立ち寄るようになる。おもちゃのプレイルームでにぎやかに遊んだり、お年寄りから手作りおもちゃを教えてもらったりする。玄関ホールに展示された世界のおもちゃを見るに、赤ちゃんを抱っこしたお母さんも気軽に訪れるようになった。児童や赤ちゃんは老人ホームのVI



▲ 特別養護老人ホーム さくら苑
おもちゃで遊ぶ、お年寄と子どもたち

ちの身体の機能を回復させることもある。音の出るおもちゃでリズム運動をしたり、手作りおもちゃに取り組むことで、動かなかった手が肩まで上がるようになったお年寄りもたくさんいる。

老人ホームにとっておもちゃは、子どもとお年寄りの交流、お年寄りのリハビリ、そしてインテリアといったように、魅力ある生活道具として活用されている。

医療の領域でもおもちゃへの価値観が徐々に高まってきた。

世田谷にある国立小児病院では、さまざまな子どもたちの成長と発達に見合った世界のおもちゃたちが活躍している。ここには全国の病院でも珍しいおもちゃライブラリーがある。長時間待たされがちな外来の子どもたちのために、プレイルームとして利用されたり、子どもたちの遊ぶ姿やおもちゃへの取組みを観察することによって治療に役立てるといった目的もある。

Pのお客様だ。

また、お年寄りがおもちゃで遊ぶことは、
衰えが

「診療室ではとうてい発見することができない、その子本来の姿をライブラリーではかいま見ることが出来る」と、指摘する医師もいる。おもちゃを通した生の情報を治療行為に還元していくシステムができ上がっているわけだ。

おもちゃが送るメッセージ

おもちゃやその使われ方は、その国の、その時代の大人たちが、どのようなメッセージを社会に送っているのかを知る手がかりになりやすい。

お年寄りだけの閉鎖的な社会になりがちな高齢者福祉から、異年齢層との交流を活発にしていこう高年齢者福祉へ。入院児をおとなしく、安静にさせることを主導としてきた医療・看護から、遊びを尊重する医療・看護へ。地域との垣根が高かった幼稚園・保育所から、地域住民に開かれた幼稚園・保育所へ。

このように、おもちゃを通して社会を観察すると、さまざまな社会の期待や願いは浮き彫りになっ

てくる。

ヨーロッパのあるおもちゃメーカーは、「子どもにとって良すぎるというものはない」というマインドをもって、おもちゃ作りに携わっているという。子どものものであるからこそ「本物」を与えたいという理念の確かさを強く感じる。また、中国の魯迅は「おもちゃを見ればその国の文化が良くわかる」とも述べている。

日本でもそろそろおもちゃに対する姿勢が問われてくるであろう。「こわれ物」、「まやかし物」の代名詞としてのおもちゃ観を払拭し、文化財の一部として考えていかななくてはならないであろう。

(芸術教育研究所・おもちゃ美術館)

記憶から

榊田 正子

幼稚園で日々子どもと生活を共にできる立場を与えられてから、丁度一年が過ぎた。四十年以上も前に自分自身が遊び育った幼稚園の同じ園舎である。

この一年私は、目の前で生き生きと動き生活している子ども達と自分との関わりを考えつつ、同時に、数十年前私自身はこの園舎でどんな風に一日を過ごしていたのだろうと考えることが度々あった。

これまで長い間別の職場に居て、保育者として直接

子どもと関わることにブランクがあることを少なからず焦りに感じている私は、現在の子どもの関わりを体験すると同時に、自分の中にあるもうひとつの保育の感覚を探し求めて引っ張ってやることによって、そのブランクがいくらかなりとも埋められるかもしれないという、漠然とした期待を持っているのかもしれない。



しかし残念なことにそうやって記憶をたぐり寄せ
てはみても、厳密にこの園舎の中での自分の姿とし
ていつもはつきりと思い出されるのは、二つの場面
だけである。その一つは、遊戯室の脇の狭い廊下
で、そこに置いてあるコート掛けに背中を当ててい
る私の姿である。コート掛けが子どもに扱い易い高
さであるし衣類を掛けるフックも出っ張っていて、

それにもたれかかることは、多少首と背中を前に丸
めなければならず背に当たる面も平らではない。し
かしそんな前かがみの姿勢の感覚とそこでそうして
いることの落ちついた感じとが、何故か結構はつき
りと思い出されるのである。一人でそこに居るので
はなく仲間と遊んではいるのであるが、何をしているの
かか思い出せない。もう一つの記憶は、玄関から遊
戯室まで続く廊下で、担任の先生が他の先生（当時
の主任先生であったような気もするし、他のクラス
の担任の先生であったような気もする）と何か話し
ておられ、その傍らに居る私である。二人の先生が

私に語りかけているのでもなく、また私が二人のお
となの顔を見上げたり話をきいているのでもない。
多分二人の先生の話は私とは無関係のことなのだろ
うが、私がそこにそうしていることを二人のおとな
が認め受け容れてくれているという極く自然な落ち
つきとあたたかさとを、私を含めた三人の位置関係
と廊下の薄暗さの感覚と共に覚えていた。

幼稚園生活の思い出が、このようにとらえようも
ない場面たった二つというのは、何とも期待外れの
感もあるが、戦後の生活の大変な時期で送り迎えな
どもままならなかったのであろう、休みがちの幼稚
園生活であったようなのでそんな関係もあるのかも
しれない。それはともかく、幼稚園と結びついた記
憶はそれだけであるが、子どもの頃の記憶はこれに
続いて次々と出てくる。自宅の応接間にあった背も
たれの大きい二つの籐椅子を向かい合せに内向きに
倒して、背もたれに囲まれた狭い空間の中で背中を
丸め縮こまって本を見ている私、二つの椅子が作り

出す隙間の大きさを工夫しながらはって出入りしている姿。小学校の体育館の裏の使われていない足洗い場の中で、友だちと一緒におしろい花の実をつぶしている私。我家の玄関脇の、丁度ひと一人が姿を隠すことができるような建物の窪み（この窪みを含めた立派でもない玄関のたたずまいを私は何故かとても気に入っていた）を、学校から帰宅して、ああいい場所だと毎日のことながら確認してホッとするとその感じ。毎夏家族と共に滞在していたお寺の離れの裏窓から見える、隣家の緑の芝庭と窓下の可憐なピンクのなでしこの花等々、無理に思い出すまでもなく、次から次へと心地よい思いと共に浮かんでくる。

面白いことに、幼稚園の二つの場面を含めて、次々と蘇る子ども時代の私の記憶は、場所（空間）に関するものが多い。ある特定の場所で独特の姿勢——それは多分その場での私に最も居心地のよい安定した姿勢なのだろう——をとっている自分であっ

たり、ある場での位置関係や視野の中の位置構成、明るさ、色彩、におい等であったりという具合である。場所を伴った記憶が多いというこの傾向が私自身の何に由来するのかが別問題として、記憶に残っているような場面で、その空間が持っている様々な味わいを子どもである私が心地よいものとして受けとめ味わっていたことは確かなことであろう。つまり夫々の場で、私なりの心地良さを感じることができるときのような、空間的・時間的ゆとりや自由さ、また気持ちの上でも充分に安定感が与えられていたのだらうと察することができる。その場でしていた遊びも一緒に居た人達も、そこでの心地良さを構成する他の要素と同等に、調和的、統合的に私自身に受けとめられていたのではなからうか。

こんな風に考えていた時、私は最近の二つ体験を思い出してハッとしました。

天気の良い日であった。年少の女兒が二人園庭に

ごぎを敷いて、その上で背中を丸めて絵を描いているのだが、その場所が、花壇の植込みのすぐ脇で、しかも滑り台などの固定遊具のそばなので他の園児の往来も激しく、何とも落ちつかない場所である。

実際、ごぎは植込みにかかって三分の一ほどめくれ上がり、地面に接している部分もデコボコしているし、他の子どもが横を走って通る度に園庭の砂利がバラバラとごぎの上や紙の上にまでも落ちてくる。

おとなの私の目からはあまりにも不安定に見えたのと、描いている絵そのものもその場所でなくてもよさそうに思えたので、「Aちゃんたち、お絵かきするなら、もう少し広い場所の方が描き易いかもしれないわよ。お引っ越ししましょうか」と声をかけた。ところが、一人の女兒が私の声に一瞬顔を上げて私を見たものの、すぐ元の姿勢に戻って下を向いたまま「いい」と素気なく答えたのみであった。もう一人は顔を上げることもしなかった。年少の彼女達にとってクラスの担任でない私はまだ馴染みの薄

い存在であるし、突然の提案には応じにくいのかもしれない、もう一度声をかけてみようかと私は迷ったのだが、下を向いたままの女兒達の様子にとりつくしまのない雰囲気を感じて、心を残しながらも、そのままその場を離れたのである。

もう一つの体験は、落ち葉を焚いて焼き芋をした日のことである。その時大勢の子ども達も焚き火の周囲で手に手にお芋を持ちながら、火の勢いがもう少し落ちてこげすぎない焼き芋ができる状態になったら灰の中にお芋を入れようと待ち構えていた。私も安全を確認しつつ子どもたちと焼き芋の期待を分かち合っていた。突然年長のS夫が走り寄ってきて「ちょっと来て」と言った。S夫は時々仲間の中に入りにくいこともあるが、そんな時も私を求めてくることは殆どない。何だろうといぶかしく思いながら「なあに」と彼の後について行くと、S夫は園庭の隅のジャングルジムに園庭がまっすぐ見える方向から登った。私も続いて登り二人が同じ段で並んだ

時、S夫は手に持っていたお芋を私に見せて「ほく、これ焼き芋にするの」と言った。皆が持っているお芋とどこと違って変わらないお芋であるし、何故こんな所まで私を連れて来てそれを言ったのだろう、と私はS夫の気持ちが充分理解できなかった。だがもしかしたら、何らかの事情で心が不安定になってその場に居た私によりどころを求めたのかもれない、それならばその心は汲んであげたい、という思いが強くなって、なるべくS夫の気持ちに沿うように言葉を返した。しかし焼き火の周囲の安全管理（他の職員もついてはいたが）も私の心から離れなかったのですぐに「じゃあそろそろお芋が入れるか一緒に見に行きましょうか」とジャンブルジムから降りることを提案し、S夫との関係を保つことを配慮しながら手をつないで焼き火のそばに戻った。皆の居る所まで来ると、S夫は私の手を離して仲間の中に走り込んでいった。

この二つの体験を自分自身の古い記憶と関連して

想起した時、私は子どもと関わろうとする時の自分の姿勢が一面的になりがちであることに気づいて、ハッとしたのである。

すなわち、ごさの上で絵を描いていた年少女兒の例で、私は子どもがしている絵を描くという行動の部分だけを切り離して、その都合良さを考えていた。しかもその都合良さは私の基準でもある。またS夫との関わりでは、その場面の中で私とS夫との関係だけを取り出して配慮している。いずれの場合も、今その場所でそうしようとしている子どもの、その存在を私の中に受けとめてみるということにおいて、充分ではなかったように思われる。保育においては、ある場面の中からある側面に焦点をあてる必要がある場合もあるかもしれない。しかしそれも、子どもの存在が幅広く豊かに受けとめられた上で意味を持つものにちがいない。

（お茶の水女子大学附属幼稚園教頭）

◇◇◇◇ 公教育は家庭教育に ◇◇◇◇
◇◇◇◇ どこまで関与するか (3) ◇◇◇◇

保育園と家庭とのいい関係は

佐野 洋子

「さあ、いくよ！ 用意はいいかい？」

「いいよーっ。佐野家名物ひっさつ自転車四人のりー」

近隣の静かな朝の雰囲気は、うちの子供たちと、その親たる私の声でやぶられる。

うちの子供は、五歳の長男、三歳の長女、一歳の次男の三人。その三人の子と保育園の荷物と自分の荷物を、経験からあみだした高度テクニクで自転車に積み、私は、朝の商店街をかけぬける。通りすがりの人の感嘆の声をききながら。

保育園なしには始まらない一日。保育園なしには、始められない仕事。保育園なしには考えられない、五歳と三歳と一歳と三十五歳の人生……。ああ、そうだった、つれあいの四十二歳の人生も……。

私は、放送局で番組制作の仕事をしている。朝の自転車四人乗りのアクションシーンに何故つれあいの姿がなにかといえ、彼は、私たちが住んでいるところから車で一時間余りのつくば学園都市で大学の教員をしているからである。つまり単身赴任。

かくして、うちの三人の子供たちは、保育園、ともすれば不規則になりがちな勤務の私、もう五年越し子供のお迎えをお願いしている近所の「おばちゃん」、どうしようもない時はつくばから車をぶっとばして帰ってくる「パパ」の手を渡り歩く毎日である。

「パパ」の顔を毎日見なくても（実際、週のうち一、二日しか見られないのだが）、保育園の保母さんとは毎日顔を合わせる。子供たちだけでなく、親にとっても、保育園は大きな存在なのだ。

この稿の課題を「公教育は家庭教育にどこまで関与できるか」と与えられたとき、しばらく考えた。

そもそも、家庭教育、公教育それぞれのすみ分けの理念などというものはあるものなのか。時代とか社会状況によってそれはいろいろに変化するのではないか。昔は公教育なんて無くてみんな家庭がやってたじゃないか。

それに、ただでさえ「私」に対しての「公」の肥大が言われている現在、守らなければならぬほどの「家庭教育」が（『公』と正々堂々と相対できるほどの『私』

が）実在しているのかさえ疑問だと思う。みんな、学校におまかせしているじゃないか。

そんな一般的な教育論は私には荷が重し、現在の状況をかこつだけの結果になるのはわかっているので、あまり気が進まない。

だから、私が何かを発言するとすれば、「保育園に三人の子を預けている母親として」、「我が家にとつての『公教育』である保育園について」、「『保育園と家庭とのいい関係とは』と課題を読みかえて」、発言するしかないのだろうと思う。

現在私は、かなり度胸のすわった母である。でも、多くの親たちは、核家族社会の中で地縁・血縁から孤立し不安な子育ての中にある。

私も育児休職をして長男を育てていた頃の不安な日々を思い出す。核家族にも満たない最小単位の家庭で（つれあいは当時も単身赴任だった）、しかも引越してきただけ。言葉の話せない（あたりまえだが）我が子と息をひそめるような暮らしをしていた。

お散歩の時間、食事の時間、まるで刑務官のようにきちんとしてタイムテーブルをこなしていた。たまに夜寝つきが悪いと「すわ、夜睡眠時にでるといわれる成長ホルモンがでないではないか」と真面目に心配したんだからね。

保育園はそんな不安な親にとって後光がさして見えるくらい強い強い味方である。

友達の中にはいったわが子はいきいきして見えるし、不思議と親のいうことはきかなくとも先生のいうことはきくのである。いちだんと大人びたわが子の姿に、私は「子供は百人の手に抱かれて育て」というおばあちゃんの言葉を思い出したものだ。

だから、「保育園にいられてまで働きたいなんて」「三歳までは母の手で』っていうじゃないの」などという意見はへとも思わず、いまや「いいところだぞ、保育園」と思う熱血かあちゃんなのである。「保育に欠ける（やな言葉だ）」だの「親が働いている」だのとけちなことをいわずに、乳・幼児はみんな保育園に入れるシステム

にすればいいのに、と思う。

そして、保育園の方も現在の子育て環境の危機をひしと感じているから、懸命に親たちの啓蒙に努めている。使命感に燃える、えらい、ありがたい保育園。

しかしある時、子育てに関して、保育園がつねに親を啓蒙する側にあるというこの図式は、果たしてこのままでもいいんだろうか、という疑問が私の中に芽生えた。だいいち私くらいのもなのだ、保育園にあれこれ意見をいうのは…。

毎月のお便り、連絡帳、保健日より、保護者懇談…。保育園から発信される子育て情報は、日常生活の細部にわたる。子育てがそもそも日常生活の積み重ねだからそれ自体は無理からぬことだ。

「朝は早く起こしましょう。野菜を食べさせましょう。散歩をさせましょう。お手伝いをさせましょう。よく、嘔ませましょう。朝、排便の習慣をつけましょう。甘いものはやめましょう。薄着をさせましょう」などなど。その当たり前といえど当たり前のことを言われても、

親は基本的に逆らわない。早寝早起きを心がけ、散歩をし、何か手伝わせることはないかと身の回りを見回し、朝ウンチをしないと、きのう野菜を食べさせなかったせいかしらと思ひ悩む。もしくは悩んでいるふりをする。

「わかっているわよ、そんなこと。それができないから困ってるんじゃないの」なんていう親は見当たらない。

えらい保育園と羊のように素直な親たち…。

でも、なんか、表面的な感じだなあ、とわたしはある時思ったのである。それに、これはもしかして子育てを通して私の生活を管理されてるんじゃないかしらとも思ったりするのである。

「そうかしら、今の親は意外とルーズな子育てをしてるんじゃないの？ 休日のファミリーレストランなんか満員だよ。子供に手作りの食事を、なんていうあんたみたいな（くそ）真面目な親がそれほど多いとも思えない。

そんな風だからあれこれ細かく指図するくらいでちょうどいいんじゃないの。うるさきや無視してればいいのよ」と友人の言葉。

「そうかなあ…。これでは家庭は保育園の下請けになりかねないんじゃない？ ひねくれた見方なのかしら…」

「ひねかれてるよ」

ここで、つれあいの登場である。

「保育園はそんな悪意に満ちたところじゃないだろ？」

「もちろんそうよ。みんな『いい人』たちよ。でもね、

親がつねに啓蒙される側で、保育園がつねに指導する側っていうのがどうもね。『子供を共に育ててゆくというパートナーとしての保育園』という意識が持ちにくいのよね」

例えば、「夜早く寝かせましょう」といったって、家庭の事情で思うにまかせないこともある。その時に親は「仕方がないんです、どうしたらいいでしょう」と堂々と相談できるだろうか。そして保育園の側もその親の思いに応じていろいろな道を共に模索してゆくだけの用意があるだろうか…。私はその先にどんな話が展開するか、そっちの方がずっと楽しみなのに…。

「親はいつもじっと聞き流しているだけよ。『そうは

いったってうちは無理だ』なんて思いながらね。保育園も家庭に対する干渉になるのを恐れてそれ以上つっこむことはしない。本当は、今の子育てをめぐる本質的問題にまで、例えば親の労働環境のことにまで話がいきつくチャンスだったかもしれないのに、いつだって『夜は早く寝かせましょう』『はいそうですね』それで終わり」

「保育園と労働環境の話しはしてしょうがないだよ」
「あら、そういう感覚が生活の場での連帯を阻むんだわよ」

もういい加減に子育ての建て前ばかりを云々するだけに終始しないで、それぞれの抱えている悩みから現代社会のシステムの問題点に気づいてゆく、ワークシヨップのような保護者と保育園の関係ができないものだろうか。

けちをつけるといえは、こんなことがあったのも思いました。

今年の夏の長女の保育参観。

見守る親たちの前で展開されたのは、二人ずつに組ん

でのトラック走。自分がゴールテープを切るのだと、張り切って走る子供たち。

しかし、わが娘。にこにこ愛想をふりまきながらのんびり走り、ゴールテープは相方にとくに切られてしまつて無いので、ゴールの手前で止まってしまった。

「ちゃんとゴールまで走るのよ」

先生の一言。

私は思った。「ゴールまで」「全力で」「負けたくないと思つて」：なんか肩に入っている感じだなあ。だいたい、三歳児に運動会の競技よろしく競争させる意味ははたしてなんぞや。

わが娘はそれはそれは生き生きと楽しそうに走っていて、私はけっこう満足したのだが、この時には、むしろ「速く全力で頑張つて走る」という課題にどうかハマってもらいたいという雰囲気、私は感じたのだ。

「あんまり、そういうの好きじゃないんです。競争より、楽しくわくわくすることを通して全力で走らせる方法はないものかしら……」

懇談の席でそう感想で述べたら、浮いてしまった。しらけてしまった場内。

そこで、またまた、つれあいの登場である。

「それで例によってうるさい親をやってきたわけ？ 『家庭教育が公教育にどこまで関与できるか』っていうテーマの方がよかったんじゃないの？ 今回の原稿も」

「ちゃかさないですよ。でもさ、ちょっとどうかと思っただのよ。『速く、全力で、頑張って…』まるで社会の価値観そのまんまっていう感じなんだから」

「頑張ってることだって、子供の健全な発達には必要なことかもしれないだろ。先生だって保育理論にもとづいてやってるんだよ。細かいことでけちつけてるっていう感じだけ」

「でも、私はただ黙って感心してみてるのなんていやだな。だって、親なんだから。それに、教育というのは『さあ、これから教育します』なんていう瞬間ばかりじゃないと思うよ。そういう瞬間ばかりなら、『これはどうかと思う』なんて親も言いやすいんだけど。ど

んなことでも親の方に向けて意見の窓を開けておく。親も思うことは伝えてゆく。そういう姿勢が大事だと思うけどね…」

やれやれ…。亭主を相手に演説をぶってしまった。「パパ、ママ、ふうふげんかしてるの？」

話している私たちのかたわらで心配そうな長男。



子供にわからない単語を並べて話をしてるので不安
になったらしい。

ごめんごめん。喧嘩してるわけじゃないのよ。

さて、気を取り直して話を整理すると、子育てをめぐ
るさまざまな問題状況が言われる中で、保育園だって必
死で頑張ってくれている。子供たちの健全な発達めざし
て。

その「健全な発達」という価値に照らして、保育園か
ら与えられる様々な肯定イメージとマイナスイメージ
…。「○○ちゃんはこうだから素晴らしい」「○○ちゃん
はこの点が困る…。それは子供に対してだけでなく親
に対して、助言という形で間断なく与えられる。「こ
んな点に注意しましょう」「健全な発達のためには、
今、子供に○○をしてあげてください…」

私は基本的には保育園の取組みに感謝しつつも、一方
で、この「子供の健全な発達」という価値がろくに検証
をなされないままひとり歩きし、その名のもとに様々な
観念がしのびこんでくるのがとてもこわい。

「これも子供の健全な発達を促すためのだ」といわれ
れば反論のしようがない。さまざまな保育理論はとても
科学的にきこえるし…。

私たち親が警戒しなければならぬのはまさにその点
なのではないだろうか。だってその科学性を論拠とし
て、それこそ体罰だってオッケーよ、ということになり
かねないじゃないの。

ただし、私のいいたいのは、親は保育園を常に懐疑の
目で監視せよということではない。

何かに似ている。この状況は何か似ている気がする
のだが…。

そうだ！ 病院！

「健康」というのは誰も疑うことのできない、絶対の価
値である。

みんな健康でいたいから、自分の身体に何か病気がひ
そんではないかといつも不安だ。本当は寝ていれば治
る風邪でも病院にすつとんでゆく。

自分の身体のことに関する情報を一番持っているのは

自分自身のはずなのに、専門家であるお医者さんのいうことが一番と、今日も薬を飲み下す。

でも治らない。というより治った気がしない。結果、「私は健康なのだ」という実感を持ってない。いつも不安なのだ。

高度化・専門化することによる情報の偏在。専門家へのおすがり。その結果としての恒常的不安。そして生きていく上での主体性の喪失…。

うわー、なにやらえらいことだ。でも冗談ではなく、この状況を押し進めれば、子育てはそうしたいままの医療の現状に近づいてゆくのでは、という予感がする。

医療における価値が「健康だ」とすれば、子育てにおける価値は「健全な発達」だ。昔、たいていの病気は医者にかからずとも家庭での養生だけで治していたのと同じように、子供も家庭とそれを取り囲む地域共同体の中で放っておかれながらそれなりに「健全な発達」を遂げていたのだ。

ところが、研究され、理論化され、専門化したとき、

子育ては私たちの手を離れてしまった。科学的保育観の名のもとに。「ニュートンが万有引力の存在を発見する前からりんごは落ちていた」にもかかわらず、私たちに、昔はりんごが落ちるのと同じくらい当たり前にできていた子育てがわからなくなってしまったのである。

わからない親は、「保育園にまかせておけば」とお任せし、羊のように従順になる。保育園は、一生懸命啓蒙に努めるが、芳しい反応は得られない。

対立も対話もない時の流れ…。対立だって、時には対話への契機となるかもしれないのに。

この稿の課題「公教育は家庭教育にどこまで関与できるのか」。どこまで関与できるのかといったって、ここまですぐという線引きはないのだろう。「子供の教育をめぐって、公と家庭が縄張り争いをする」という図式ではもう事の本質はとらえられないと思うのだ。

結局、結論めいたことをいうとすれば、今や自信喪失気味の親や家庭の復権が、教育の場では必要なのだろう。言葉を変えれば、それは公教育に対峙できるだけの

「親の主体性」ともいえるだろう。そして、教育を家庭の「義務」というよりむしろ「権利」であると捉えかえた時、その自信は生まれるのではないか。

「ともかく、親が自信を回復することよ。子供のことをわかるのは私なんだってという自信を持つことよ。そして、『公』の側にどんどん思うことを伝えてゆく。『私』を守るんだってという意識をもつことよね。互いにどうすみ分けるかは、それからの問題だと思ふのよ」

「言うのは簡単だけとね。道は遠いっていう気がするよ」

もちろん私だって、自信に満ちた親ではない。

ああやった方がよかったか、こう叱ったほうがよかったか……。『子育ては悔いと迷いの連続だ』というのが実感である。

だが、おちおちそんな愚痴さえこぼしていられないほどの、この子供たちをめぐる暗澹とした状況は何だろう。

今は保育園だからまだいいのだ。

だが、子供がいずれ進学するかもしれない近くの公立中学では、父母が授業の監視をしているという。「あそこの小学校ではいじめで大変だったよ」「私立にあげたいけどお金がねえ」「せめて越境させた方がいいかしら」

長男が学齢期を迎えた今はそんな話ばかりが聞こえてくる。

「これから、小学校、中学校、と進んでいったときに、親の力が試される時よ。つよい親になってやろうと。いじめ・体罰・校則・管理よ、待ってなさいよ！」

ひとり気炎を吐く私。

一方つれあいはいえは、

「やれやれ、先生も大変だけど、おまえもいろいろたいへんだな。『おまえのかあちゃんおっかねーな』、なんていじめられるかもなあ。まあ、何でも成長の糧といえば糧だから、めげずに育ってゆくんだけぞ」

と、しきりに長男を慰めているのであった。

(NHK・ディレクター)

続・庭の番人

別れの前「子ども」

土橋 光子

四月三日（金）

今年は桜の開花が早く、もう満開でチラホラと散りはじめました。すぐ昼時です。外に子どもたちの声がきこえ、大急ぎで出ていって見ます。女の子が二人、かがみこんで桜の花びらを拾っていました。器はもみじのような小さな手の平です。そっとのぞきますと、

子「あっ！ おばあちゃん、昨日ね、お花が舞って

いたの、つかもうと思ったら逃げちゃった。」

私「そう、それで今日は拾っているのね！」

子「うん！ さくら水つくるの、さくらごはんも！」

私「私もお手伝いさせて、今朝ちょっと掃いたので少ないでしょ！」

拾いはじめました。お互いの手の平を開いて見せあいます。私の手の平から子どもたちの手の平へ、花びらは移っていきます。五瓣の花を拾い上げて、花粉をつけた雄しべを見つめて、

「あら、男の子ばかりだわ！」と一人言を言うと、

二人は手を休めて覗きこんできました。

二人「どれ、どれ！」

私「あのね。この黄色い粉をつけてるの全部男の子、ほんとは真中に女の子が一人居るの。」

きつと、ヒヨドリさんが女の子食べちゃったのね、このふくらんだところに甘いおいしい蜜があるのよ」

と別の一輪を私が口に含んで喰べてみせると、二人の目はまん丸になって、私の口もとをじっと見つめています。一瞬、時が止まりました。

私「小鳥さんて、おいしいものがあるところをよく知っているのね！ お庭の中に沢山おちてるから、どうぞ！」ときさそうと、急に、

子「あのね、この子のぞみちゃん、私なつきってゆるの。みんなはなっちゃんとか、なつきちゃんて言うの！」

庭へどうぞと言われた時、名のらなければと咄嗟に自分達を紹介してくれるとは……扱て、私も名のらなければと、「私、桜のおばあちゃん」。戸口に立っ

て「どうぞ」と手を延べると、何の不思議も感ぜずに、そう思ったのか、名前など、どうでもよかったのでしょうか？ うなずくと、そっと頭から入って来ました。

庭の苔の上に散っている桜花は、美しい薄紅色をして、しんと静かです。なっちゃんは緑の苔をそとなでながら、

なつき「いいきもちだね。やわらかくて、フワフワだね、これいっぱいにして、石も木もみんななどかして、ここへねころんだらいいね！」

そして、マンガの主人公たちの名前が口を突いて次ぎ次ぎ出てきます。彼等に願って緑のジュータンにしてもらいたいのでしょうか！ 二人が拾いはじめたので私は家に入り、丁度よさそうな透明のバックコップを三個持って来て、「これ使えますか？」とそっと出すと、早速、手一杯の桜の花びらを入れ、拾いたして一杯にすると、帰っていききました。

「さよなら、気をつけてね！」

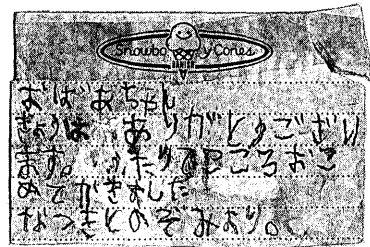
二人は左右を見て手をあげ、道を渡り、通りを走って行きました。家に入るのを見とどけて、戸をしめて……。

昼食です。仕度を終わってテーブルを囲みましたが、子どもの声を聞いて、娘が外をのぞいて見ました。何かあったようです。

娘「かあさん、早く外に出て見て、右のはこべの中！」

私は急いで外に出て見ました、そこに何を発見したとお思いですか。美しい三つのバック。水をはり、さくらの花びらを浮かし、緑のはこべ、紅椿の花、ピンクの八重つつじ。この組み合わせが二個。残りの一個には、水をはり、桜を入れ、椿を二輪浮べその外側に又桜の花、雄しべに囲まれて緑の葉っぱが一枚、すっとたててありました。そしてテーブルで手紙がとめてあります。

こちらも二人でその手紙をのぞきこんで読みました。



娘「どこで書いたかよくわかるわね！」と笑っていました。

コンクリートの上でごりごり書いたのでしよう、一字一字にゴリゴリがでていて、文面のように、ほんとうに心が伝わってきます。

我が家の昼食のテーブルには、思わぬ美しい贈り物が仲間入りして、のぞみちゃんと、なつきちゃんも一緒に食事をしているような気分になりました。その後、折り紙を二色つなげてまるめた棒が二本、

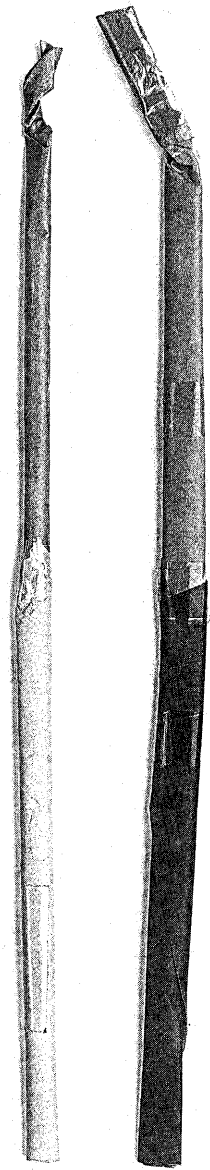
同じ場所に置いてあります。お箸でしょうか！勿論、私もお礼をしました。このことよって三人の糸が何時まで続くのでしょうか！

午後三時、そろそろ戸を開けて見ましようか。いえ娘が外出から帰るのを待ちましよう。でも、今日はもう終わりかもしれませぬね。そんなことを思いつながら、はこべのところに苺のバックを二つ、中に手紙を入れました。

このバックもつかってください。

なつきちゃん！ さくらの

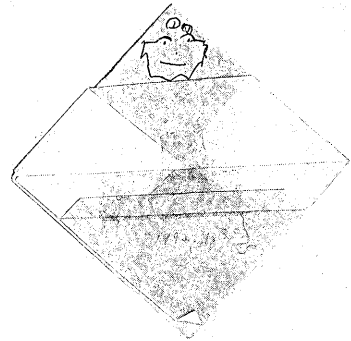
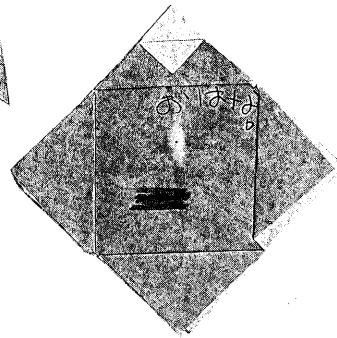
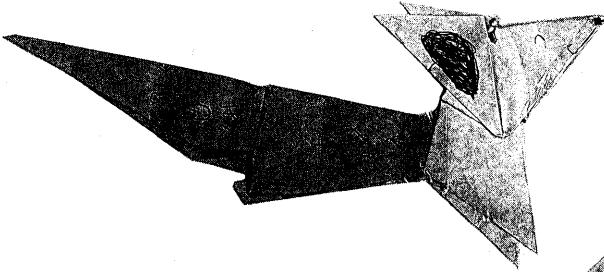
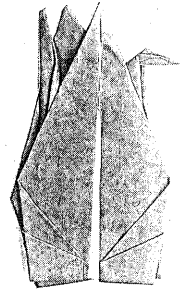
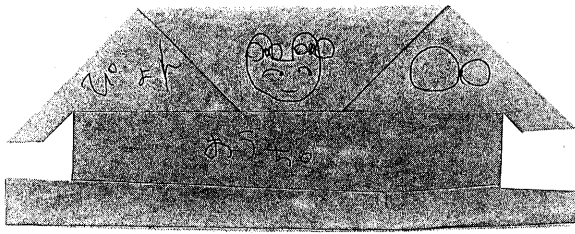
のぞみちゃん！ おばあちゃんより



四時頃でした。言葉にならないクッ！クッ！と言う声に続いて、バタバタと子どもの駆けていく足音を聞いて、そわそわと戸のところに出ていきました。はこべの上に沢山の贈り物を発見したので、バック一杯に水を張り、桜、椿、山吹、薄緑の若葉、自分の家の庭のもの、道に散っている花びら、隣家の垣根からそっといただいたもの等で満たした二個のバックと折り紙で折った鶴、花、家、きたきつねに、絵や字が書いてありました。必ず持ちに来てくれると信じて置いてあるのです。

「何日間、生かしておけるかしら？」と花のバックは涼しい洗面所の棚に飾りました。

折り紙の贈り物には、そっと日付を書き込んでお



きました。

三十分後、通りを覗いて見ますと、まだ声がします。手を後に組んで、声の方へそと歩いていきます。三人が路にうづくまって、熱心に何か画いています。「ワッ！」と声を出します。近づくのを知っていたように二人と小さい妹さんが、ニッと笑いながら顔を上げました。

のぞみ「あのね！ あのね！ なっちゃん おひつ

こしなの！」

私「えっ！ いっっちゃうの？ どこへ？」

なつき「あたらしいおうちできたの。おとうさんが
たてたの！」

のぞみ「あのね、なっちゃんのおとうさん、だいく
さんのの！」

なつき「がっこうにいくときひっこすの！」

私「じゃ、がっこうべつべつなの！」

と、つい当たり前のことを聞いてしまいました。の
ぞみちゃんの気持ち痛い程、伝わってきたので
す。二人は同時に、「うん！」とうなずいていまし
た。

なつき「でもね、なつやすみにはあそびにくるよ」

四人の間に、ちょっと沈黙の時間が流れました。私
の心の中で、何か言ってあげなければと声をするの
ですが、咄嗟に、この時にふさわしい言葉がみつか
りません。しばらく三人を見つめていて、やっと
「今日は、とても楽しかったわ、ありがとう！二
人とも元気で一年生になってね！」

引越していくなっちゃん、残るのぞみちゃん、

妹さんと私を加えて、春の一日はようやく暮れはじ
めました。華やいだ後のもの淋しい夕暮れです。

四月六日

のぞみちゃんは妹さんをお供に連れて、お母さん
と学校へ往きました。なっちゃんも新しい土地で新
しい友達を見つけて、世田谷の路地で遊んだ続きを
はじめることでしょう。

ガクを残して散りはじめた桜吹雪きの中を新一
生が何組か通っていきました。

「なっちゃん！ のぞみちゃんは元気です。妹さん
もお母さんの自転車に乗せてもらって幼稚園に通
いはじめました！」

今年も小さな庭の桜の木の周りで、新しい交わり
が始まるうとしています。会ったり別れたりしながら
ら！ 平和な年になりますようにとあつい祈りをこ
めてそっと眼をつむりました。

(元・武蔵野相愛幼稚園)

ある日の育児日記から

(28)

佐藤 和代



四月から、有は0歳クラスに入園、まは3歳クラスに進級。毎年、新学期の前は針仕事に追われますが、今年は特に大変でした。ふとんカバー二枚、毛布カバー二枚、手さげにコップ入れ、服もおしめも名前をつけて：入園前はどこの家でも、こんなことをしているのでしょうか。

それにしても、有が起きている間は、危くて針を出せません。眠っているときは、貴重な仕事の時間。いつ縫ったらいいの？ そこで、つねづね「子ども預けて働いている人は、忙しい上に、針仕事なんて苦手なタイプが多いのよ。どうして手

作りなんてさせるの！」と怒っていた友人に声をかけました。「夜、ベビーシッターにきて。あなたの分も縫うから」契約成立。有と遊んでもらっている間に、急いでミシンかけです。

このせわしさを別にすれば、私は手づくりは好き。保育園では、0歳児だって、自分のふとんを見分けるのです。園で同じカバーを用意してくれば、親は楽。でも赤ちゃんが「ぼくのふとんがあった！」とばかり、ハイハイしていったりはしないでしよう。やっぱり手づくりしてやりたい。

…と言ったら、さっきの友人に「そういう人がいるから、手づくりを要求されるものがへらないのよ」と文句を言われましたけど。



婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(7)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

最初の手紙(十)は日本の子ども達について書いたものである。ピアソンは子ども達の性質が良くしておとなしいと書いているが当時の子どもがそうだったのか、現在の我々には首をかしげたくなるようである。しかし、ピアソンが日本の子どもをとて愛していたことがこれらの手紙から読みとれる。ところで、当時の横浜は国際的な貿易港として賑わい外国商人や船員の遊樂の港として風儀も乱れ、貧しい人々が多かったのである。目がただれ頭に腫れ物ができ、みじめで病氣のように見える子どもや小さな赤ん坊を背中にくくりつけて遊ぶ大きな子ども姿は当時はどこにでも見られたものであった。

日本の古い因習に生きる人々の生活に疑問を抱くピアソンの手紙はしばしば偶像礼拝を非難して書いているが、それだけに当時の宣教師によって医学、自然科学、教育、音楽など近代化の推進に開拓者としての役割を果たした貢献は高く評価されるべきであろう。

一八七一(明治四)年八月二八日、横浜山手四八番で開設したアメリカン・ミッション・ホームは中村正直が

広告文を書いたあと生徒が増え入学希望者を断らなくてはならないほどになった。このため、ブラインたちは広い建物と敷地をさがし、翌年の十月一日に山手二二番（現・横浜共立学園校地）に移転した。そこはロシア公使のために用意されていた土地と敷地約三エーカーで広々とした土地には松、柳、桜、木蓮、椿などの樹木が茂り（註1）隣地には宣教師S・R・ブラウンの邸宅があった。ブラウンはここで聖書を邦訳し、塾を開き日本の近代化に貢献した青年男子を教育したのである。

十一月十日の手紙（十三）で判るように、ブラインたちを悩ませたのは二一二番には男の子と女の子を別々に収容する部屋がなく、ここで大きな決断を余儀無くせざるをえなかったのである。祈りをかさね討議し、将来を見通して遂に女子教育に専心することを決意したのであるが、男の子達をホームから出すときはどんなに辛かったことか手紙から察せられる。

ホームは日本婦女英学校（現・横浜共立学園）と改称したが、混血児の教育は明治二四年まで続けられた。

十、

横浜、一八七二年八月六日

愛するメアリー、バーティ、キティーへ

今日、この家であなたたちが歩きまわっているのを見る事ができたらどんなにいいでしょう！そして私の両腕であなたたちをしっかりと抱きしめ、何度も何度もキスすることができたら！でも、それは出来ないこと。私があなたたちのことをどんなに思っているか、私の見聞きする沢山のことをあなたたちにお話ししたくてたまらない気持ちをわかってもらえるかしらね。時間があればもっと日本から手紙を書くのですけどね。それに、他の可愛い子どもたちにも手紙を書きたいのですけど、時間がないのでお母さんかAおばさんに頼んでこの手紙を職業学校に届けて下さい。そして、学校の子どもたちに読んで貰って皆に楽しんで貰い、私がどんなに遠く離れていても皆のことを考えていることを知ってほしいのです。

さて、日本の子どもたちについてもう少しお話し
ましようね。それは、あなたたちにこの国の子ども
たちのことを出来るだけ知って欲しいし、子どもの
話を聞くのはきつと好きだろうと思うからです。私
は日本の国が広さに対し大人の数が世界の他の国と
比べて多いのでこの国にはとても沢山の子どもがい
ると思います。

この国に住む人々にとって幸せなことは子どもた
ちがとても性質が良くしておとなしいことです。もし、
この子たちが私が見たような乱暴で喧嘩早い
子どもたちだったら大変でしょうね。ある人たちは
日本の子どもは性質が良いのは親たちが何でも子ど
もたちに好きなようにさせているからだと言ってい
ます。さて、それは子どもにとって大変すばらしい
事だとあなたは言うに違いありません。この
国の子どもたちのようにそんなに悪いことをしな
いならばよいのですがね。でも私は日本の子どもた
ちは別として、そんなやり方をさせようとは思いま

せん。私は日本の子どもたちほど生まれつき性質の
良い子どもは他にないと思います。

でも、この子どもたちの生活は幾つかの問題があ
って、ある子どもたちは国の保護と世話を非常に必
要としています。この子たちは、汚くて目はただ
れ、頭には腫れ物ができていて背中が曲がり、みじめ
で病気のように見えます。そしてこの子たちやその
親たちは他にもっと良い生活があるのだということ
を知らないのです。街を歩くとどこでもこうした子
どもたちが群がって来て、よほどの忍耐と哀れみの
心がなければうまくつきあっていく事は出来ません。
とても面白く思うことが一つあります。街で見か
けることですが六歳から十歳、或いは十二歳位の子
どもが向こうからやってくる時、頭が二つあるよう
に見えるのです。さて、あなたたちはどうしてだと
思いますか？ それはね、日本では赤ん坊を腕で抱
くかわりに背中におぶっているのですよ。そう、す
こし大きくなった子どもたちは小さな赤ん坊を背中

に紐でくくりつけているのです。これが赤ん坊をお守りする最もやさしくて安全なやり方だからです。

そこで、この子たちが向こうからやってくる時には肩ごしに赤ん坊の頭だけしか見えないのでまるで頭が二つあるように見えるのです。私はそれを見馴れるまで何度もその奇妙な子ども姿を見てびっくりさせられたものです。これは、可哀そうに赤ん坊にとつては大変苦しいやり方だと思います。なぜなら赤ん坊が眠ってしまうと、赤ん坊はよく背中で眠っていますが、可哀そうにその小さな頭は後ろにのけぞり、太陽の光が顔や目にギラギラと照りつけ、その首は折れてしまいそうに見えます。

大人たちも子どもたちも帽子をかぶらず太陽の陽ざしをさけることをしていません。大人たちは日傘をさすことはあっても子どもたちは何もしてないのです。ですから多くの子どもたちはひどい腫れものができるのです。人々は邪悪でもとも悪い習慣があるので神様は罰としてそういう人々を病気にさ

せ身体を弱くさせます。また、恐ろしい病気にかかるので可哀そうにそれが子どもに移って子どもたちを苦しめるのです。子ども自身にはどうすることも出来ないのですから本当に可哀そうだと思います。なお悪いことに、ここには蚤や蚊が一杯いて子どもたちはそれに刺され、かゆいためにあちこち掻くので又それが傷になってもっとひどくなってしまうのです。

私が一番悲しく思うのは、この人たちがもっと良い暮らし方のあることを知らない事です。この子どもたちの親たちは自分たちがもっと清潔で勤勉で正しい暮らしをすればこんなひどい病気にならずすむということを知らないのです。彼等はいつも拝んでいる偶像が自分たちの病気をなおすのに何の役にもたたず、それが出来るのは父なる神だという事を知らないのです。

ある日、私は目のひどくただれた男の子が寺に行くのを見ました。寺はこの人たちの教会のようなと

ころです。この子は、あなたたちの部屋の天井くらいの高さもある大きくて見るも恐ろしい像の前に上がって行きました。この像は赤や黒、白の色で塗られていて、その口を大きく開きべろっと舌をだして、それはなんとも醜い像なのです。男の子は両手でその像の足や脚をなでまわし、その手で自分の両方の目をなでているのです。

私はバラ宣教師に何のためにそんな事をするのかと尋ねました。彼が言うには、その神さまは目の病気をなおす神様で人々はその神様にさわった手で目をさすると目の病気がなおると信じているのだそうです。

この人たちにもっとよいことを教えるべきと思いませんか。……略……

それからもう一つ、私にとって悲しいことは前に書いたと思いますが、この国の人々が歌を歌わないことです。

このホームの小さな子どもたちが優しくて美しい

日曜学校の讚美歌を歌うのを聞くのは本当に楽しいことです。でも、この国の可哀そうな子どもたちは人間は声をもっていてそのような目的のために使う事を教えられていないのです。この国の言葉で書かれた讚美歌はまだ一つもありません。なんとという損失でしょう。そう思いませんか。

このホームの私たち女の人たちや宣教師たちみんなはこのホームの子どもたちに大切な真理を教え、これまでよりももっと賢く幸せになるよう心から願っています。これは正しいことと思いませんか。そして是非このために私たちを助けてほしいのです。

……略……

あなたたちは幸せで暮らせる家庭があり、聖書があり、天にいらっしゃる父なる神の愛について知っていますね。私はあなたたちに日本の気毒で無知な人々のために何かしてあげたいと思って欲しいのです。私はアメリカの子どもたちが自分だけの楽しみのためにお小遣いを全部使ってしまうより

はそれを貯金してミッシヨンの献金箱に入れてほしいと願っています。お金を自分だけのため使っていると利己主義になって強情で不親切な人間になってしまいます。でも、もしあなたたちが良いことをしようと努力し、自分の出来るかぎり他の人々のためになるうとすれば、だんだんと私たちの救い主に似てくるでしょう。そして、きっと、もっと幸せになり他の人々に愛される人間になるでしょう。私はあなたたちがそのような子どもたちになれるように神に祈っています。

あなたたちが愛する おばあちゃんより

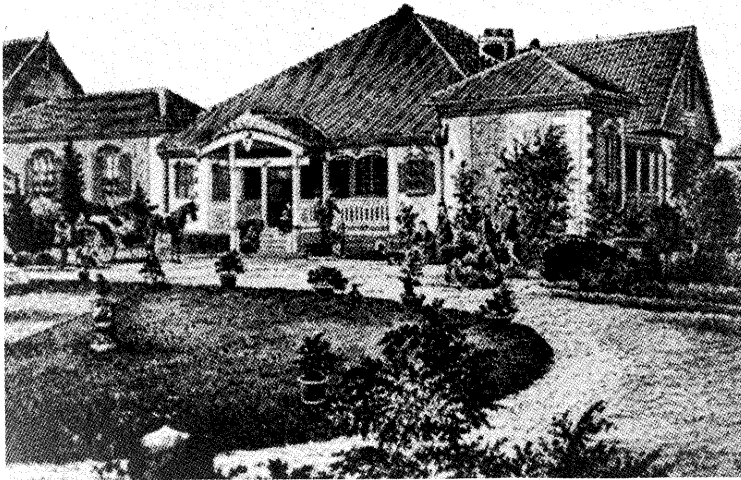
*

十三、

横浜 一八七二年十一月十日

故国の可愛い孫たちへ

私たちが素敵に大きな家（写真参照）に移って皆



がとても満足して暮らしていることはお父さんやお母さんあてに書いた私の手紙で聞いていますよね。

今では私たちの家族も増え、前よりもっと快適になりました。そのことについてはこれ以上何も言うこととはないのですが、でもこんなに楽しい私たちに大変悲しいことがあるのです。それは私が日本に来てから味わった最も辛いことの一つでした。あなたたちもそれを聞いたら私たちと同じように悲しむだろうと思いますが、それは私たちと一緒に暮らしてきた小さな男の子たち全員をこのホームから出ていって貰うことになった事です。

私がああの子たちをどんなに可愛がっていたか、あなたたちは知ってるでしょう。とくにあの小さなチャーリーとエディーのことはわかってくれませんか。私には自分の亡くした子たちが身代わりになってここに生きてくれたように思っていたのですよ。でも、いろいろとやってみて男の子と女の子とを別々に入れる部屋がなければ一緒にしておくのは

良くないということが分かったのです。私たちはなかなか決断できず、何度も何度も話しあい、神様にどうぞ最善の道をお示しくださいと長い間祈りました。そして私たちは決断したのです。日を定め、男の子の親戚や知人に来て貰って全員を引き取って貰うことにしたのです。

それは何と悲しい日だったでしょう！ 可哀そうに男の子たちはこのホームから出たくないと行って大声で泣くものですから私たち女の人たちも一緒に泣いて泣きました。一人の小さな男の子は門を出るとき、道端の草のうえにひっくりかえって「いやだ、いやだ、この家から出ていきたいくない」と言って泣きじゃくりました。

私たちはそれが神の意志であると考え、女の子たちだけになればもっとよく教育できると思ってしたことだったので。今はただ、神様がこの男の子たちのために良い友だちを与え、こと同じような家庭を与えてくださるようにと祈っています。そしてそ

こでイエスについて教えられ良いクリスチャンとして成長するように私たちみんな心から願っています。

これからはあなたたちもこの学校とホームが女の子たちだけしかいないと思つて下さい。でもバーティ、それならもうおばあちゃんたちを手伝わない、お小遣いをためたりなどしないなどと考えないで下さいね。なぜって、この学校で学んでいる女の子たちは、やがて先生になって男の子たちを教えるのです。そして私たちよりもっと多くのことを男の子たちにしてあげられるようになるのです。

さて今日は私たちの可愛い女の子たちの一人についてお話をしてみたいと思います。幼いアニーについてはこれまでに度々書きましたよね。

ある朝、私はいつものように子どもたちの世話をするために朝食のテーブルにつきました。そこで、いつも私は子どもたちの暗唱する聖書の何節かを聞くことになっていたのです。そのとき私はアニーがいないのに気がつきました。私はどうしてアニーが

いないのかと尋ねました。あの子は病気だということです。そこで私がすぐアニーの部屋に行くと、ただ少しおなかが痛いからと言つて寝ていたので。でも本当は小さい子どもによくあるように、なまけぐせと眠いのとで朝早く起きるのが嫌だったらしいのです。

「さあ、さあ」と私は言いました。「起きて朝ご飯を食べに来てちょうだい。その後でおなかが痛かったら又寝ればいいでしょう。さあ、さっさと着替えて早くいらっしゃい」

そして私は朝食のテーブルにもどりました。それからまもなく一人の紳士が職人をつれてやって来ました。この前のひどい地震で壊れた天井を修繕するために様子を見に来たのです。この紳士はとても親切な人で私たちを助けたかと思つてくれました。そこで日本の石工に見せてどのようにするか話しあつてくれました。その壊れた天井というのが丁度アニーの寝ている部屋だったので。そこで私た

ちは天井を見るためアニーの部屋に行きました。私たちが部屋に入ったとき、この幼い子どもは小さな寢床のそばにひざまずいて、一人で朝のお祈りを唱えていました。この子は驚いて飛びのくでもなく、いそいそお祈りを終わらせるでもなく、とても静かに目を閉じて小さな両手を組み合わせていつものように朝のお祈りを静かに唱えていたのです。

その紳士はクリスチャンではありませんが、この子の姿を見て私をふり返り目に涙をためて言いました。「なんて、いじらしいのでしょうか」と。

アメリカのクリスチャンの子ども何人が私たちの小さなアニーと同じような行動がとれるでしょうか。もし、あなたが他の子どもたちがもうご飯をあらかた食べ終わって早くしなくちゃと焦っているときに立ち止まってお祈りをするなんて考えられないでしょうか？ それに知らない人が部屋に入って来ても驚かないでひざまずいたまま祈っているなんて考えられますか。

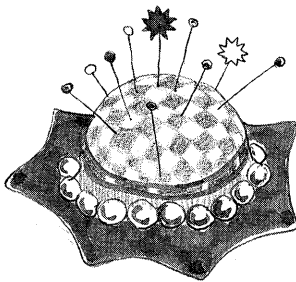
アニーのお話はあなたたちに善い教えとなるでしょう。あなたたちにとってもお祈りが非常に善いもので神聖なもの、誰も邪魔することはできないものになってほしいと願っています。

あなたたちの愛するおばあちゃんより

(国立音楽大学)

註(1)「横浜共立学園120年の歩み」

横浜共立学園 一九九一 51、52頁



新年度を迎え、今月から「堀合先生に学ぶ」の連載が始まります。堀合先生の保育にふれる中から、先生の保育の心を十文字短大の立川多恵子先生と上垣内伸子先生が、毎月交代で報告して下さいます。保育の大先輩から、私も多くのことを学びたいと思っております。読者の皆様もどうぞお楽しみに。

「公教育は家庭教育にどこまで関与するか」第三回目は、佐野洋子さんの母親の立場からの報告です。三人のお子さんを保育園に預け、放送局のディレクターという超忙しいお仕事をこなされる佐野さんは、きっと保育園ととても「いい関係」ができているのでしょう。私も二人の子どもを〇歳から保育園で育てていたのだいた親として、あの頃のエネルギーを懐かしく思い出しました。

昨年春より連載の土橋光子先生の「庭の番人」は、今回の続編で終わりとなります。五回にわたり、先生のお宅の庭の桜の四季にまつわる子ども達との心温ま

るエピソードを、どうもありがとうございました。

一年経つのが何と早く感じられるのでしょうか。この間、娘の中学校入学を祝ったばかりと思っていたのに……もう次の一年生を迎える時となってしまいました。

娘にとってこの一年は、大きな成長の年でした。通学区域が大幅に広がり、いろいろな地域や環境の友だちや先生方との出会いがありました。小学生の時には同じ学年の友だち同士のおつきあいが殆どでしたが、中学では、クラブ活動や奉仕活動を通して、上級生との交流も多くなり、先輩・後輩としてのつきあい方も学んでいるようです。

朝は父親より早く家を出て、夕方五時に帰宅、夜は翌日の予習、という娘のスケジュールに、母親としては、らくなったというか、淋しくなったというか……、複雑な気持ちです。

そろそろ、子離れが私の大きな課題となりそうです。

(K)

幼児の教育

第九十二巻 第四号

(一九九三年四月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年四月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所

図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二一一

発売所

株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三二三二九二一七七八一

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレール館特別企画 ヨーロッパ幼児教育視察

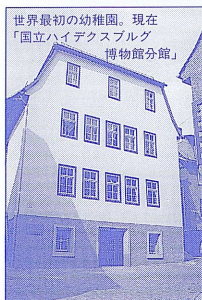
'93年7月27日(火)～8月7日(土)・12日間

フレール先生の遺跡と教育施設をたずねる

▶ドイツ・チューリンゲン地方→ロマンチック街道→コペンハーゲン→ロンドン◀

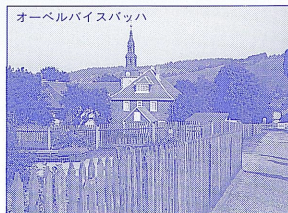
ごあいさつ

「フレール・ツアー」も今年で第14回を迎えることになりました。その間、「フレール生誕200年祭」「フレール幼稚園創設150周年」などの行事に参加し、また、東西ドイツの統一にも遭遇してきました。毎回、ご参加の先生方からご好評をいただき、2回、3回と参加されるファンの方もいらっしゃいます。今年は、幼児教育のルーツを訪ねるとともに、ロマンチック街道をバス旅行で南下し、後半は、アンテルセン、ハムレットなどにゆかりのあるコペンハーゲンを訪ねる企画といたしました。ぜひこの機会に歴史の薫り高きヨーロッパの風に吹かれてみてはいかがでしょうか？お誘い申し上げます。



フレール先生ゆかりの地 チューリンゲン地方

- エルフルト
- バードブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ
- バード・リーベンシュタイン
- ローテンブルグ
- コペンハーゲン
- オーデンセ
- ロンドン



旅行期間	1993年7月27日(火)～8月7日(土) 12日間
旅行代金	867,000円 (おとな1名様)
募集人員	25名 (定員になり次第締切) (らせていただきます)
申込締切日	1993年5月31日(月)

企画：キンダーブックの**フレール館**
 旅行：日本交通公社 運輸大臣登録
 主催：日本交通公社 一般旅行業第64号

●お問い合わせ先

フレール館 ヨーロッパ幼児教育視察係
 東京都千代田区神田小川町3-1
 〒101 ☎03(3292)7781(代)

JTB団体旅行新宿支店ヨーロッパ幼児教育視察係
 (運輸大臣登録一般旅行業第64号)
 東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
 〒160 電話03(3346)0181 (月～金09:30～17:30)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレール館

幼児教育の先駆者、F.W.フレーベルの生涯と、
自らが考案した恩物の使い方を体系的に収めた
世界で初のビデオが完成！

フレーベルの遺した幼児のための最高の贈り物「恩物(Spiel gabe)」について、その根底に流れる思想と、その望ましい与え方、使い方を幼稚園での実例やコンピュータグラフィックスなどで、わかりやすく解説したビデオです。

発見は遊びの中に。
現代の子どもたちへ
ゆたかな創造力を導く
フレーベルの恩物。



ビデオ
教育玩具 フレーベル恩物gabe(全五巻)
第1巻・フレーベルの生涯と恩物のめざすもの
第2巻・第一恩物 第二恩物
第3巻・第三恩物 第四恩物
第4巻・第五恩物 第六恩物
第5巻・第七恩物～第十恩物
第十一恩物～第二十恩物

全5巻 紙ケース入 70,000円(税込)

(分売不可)
★カラー/ステレオ/HIFI

監修 ■ 和久洋三
(おもちゃの科学研究会代表)

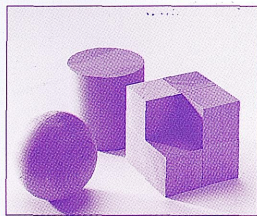
企画協力 ■ 青木八代
(元 玉成保育専門学校教諭)

指導協力 ■ 学校法人アルウィン学園
玉成保育専門学校

撮影協力 ■ 学校法人アルウィン学園
玉成幼稚園

◆恩物遊びのねらい◆

- 自発性を引き出す
- 身体の器官・機能の発達を促す
(活動性を満足させる)
- 創造力を育てる
- 集中力を養う
- 情緒の安定を図る
- 自分で後片づけする習慣を身につける
- 科学的思考の基礎を養う
- 美的感覚を養う
- 社会性の基礎を養う



遊具の原点は、保育の原点。
遊具である「恩物」を子どもの世界へ。

●推薦します。

広島大学名誉教授/日本ベネクトゥッチ・フレーベル学会会長
日本保育学会前会長・同人 名誉会員

莊司 雅子

フレーベル館創業
85周年記念ビデオ出版

教育玩具
フレーベル恩物
gabe

ビデオ〈全五巻〉

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292 7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館